
鏡の中のボク

サワデー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中のボク

【Nコード】

N1519B

【作者名】

サワデー

【あらすじ】

ある日、中学三年生の巧の元に届いた贈り物。中に入っていた手鏡の中から出てきたのは、もう一人の自分だった。これをきっかけに巧は大きな事件に巻き込まれ……！？

プロローグ

真実の世界。

偽りの世界。

見つめる世界。

見つめられる世界。

見つめているのは自分だけ？

見つめているのは本当の自分？

真実は鏡のみぞ知る。

この物語は、その真実をみた者たちの話である。

そう、世界は一つではないという真実を。

偽りはないという真実を。

プロローグ

十一月。ぽかぽか陽気のなか、あたたかい日差しが差し込む洋室
十畳のリビングで、一人の女性がテレビのとある番組に釘付けにな
っていた。

四十代前半のこの女性。

テレビを前に、おせんべいにかじりつきながらも、その目はすべ
てを逃すまいと一時の隙をも見せない。

間食の習慣がありながら、幸いにして太ってはいないものの、よ
く見ると化粧の乗りも厚く、しわ隠しのためにパウダーを塗りたく

った形跡があり、それはまさに「おばさん」を象徴するものであり、十分にその要素を持ち得ている。

「今回は前回よりもグレードアップして、ティッシュを収納できるケース、さらに便利な小物入れまでつけちゃいました！」

「でも、気になるのは、やっぱりアレですよね？」

テレビの画面上には、顔をしかめた、わざとらしい演技をする女性タレントが映っている。

その演技に、自信满满といった感じで応える男性商人。

「いえいえ。ご心配には及びません。今回は、手軽に利用可能なクシをおつけいたしまして、お値段は…」

なかなか次の言葉を言わずにじらす商人。

「…いいです！ 言っちゃってください！」

目を覆う女性タレント。二人のわざとらしい演技は続く。

「ええ。それでは、改めて発表させていただきます。こちらの商品のお値段は、現在セール中につき、なんと…！」

ジャジャン！

「わぁーお！」

テレビの前の女性は、おせんべいの入った口を大きく開けて叫んだ。

『テレシヨップおばさん』。

彼女は一部の人々からこう呼ばれていた。

確かに彼女はそう呼ばれるにふさわしい人物であった。…いや、そう呼ばれなければならない、といったほうが正しいだろうか。

彼女はその呼び名通り、テレフォンショッピングに関しては鬼だった。

そのテレシヨップを通じてこれまで手に入れた商品は何点となったのか、今となっては彼女以外、誰も知らない。もしかしたら、あの番組にエキストラとして出演しているのでは、という噂まで立つ始末だ。

「…これよ。これを待ってたのよ、わたしは！」

そして今回も、新たなお買い得商品に目を光らせ、立ち上がった。
テレシヨップおばさんの手元には、日に照らされたペンとメモ帳
が静かに光を放っていた。

第一話 贈り物（１）

贈り物

1

ガオー！ ガオー！ 起きて！ ガオー！ 起きろ！ ガオー！
！ ガ！
プチ。

素早く手を伸ばし、ベッドの脇にある恐竜の目覚まし時計のスイッチを押した。

「ふわあ〜」

少年はまだ眠い目をこすりながら、ゆっくりと目を開けた。

「あーあ。今日も雨か」

カーテンの開けられた窓の外を見て、少年はため息をつく。土砂降りではないが、淡々と降っている雨。

「あー、やだなあ。学校行きたくないなあ。： よつこらしよつと」
この数日間ずっと降り続けている雨にも、ほとほと倦怠してきたとこだ。

嫌気が差しながらも、少年はまだ出る気のしないベッドから立ち上がった。

「うつつ、さぶつ」

体をぶるつと震わせる。

十一月に入ったばかりだが、最近、朝晩の冷え込みがいつそう厳しくなってきた。ついひと月前までは、まだ夏の暑さが残っていて、この先どうなるのだろうと言っていたものだが、この分では、暑さの反動から来るこれからの冷え込みが心配だ。

少年は再び体を震わせた。

用を足した後、少年は一階への階段を下りた。

リビングに降りてくると、少しは高級感の漂う木造四人用テーブルの上に、一枚の紙切れが乗っていた。

「ん？」

少年はその気になる紙切れを手に取り、その事柄を読んだ。

「たつくんへ。」

ちょっと仕事の都合で三日くらい帰ってこれそうにないんだけど、大丈夫よね？

冷凍食品はまとめ買いしといたから、お弁当に困ることはないと思うけど、そのほかの事はいつもの棚にお金入れとくから、何とかやりくりしといてくれる？

あとは、朝一でテレショップの商品が届くと思うんだけど、悪いけど受け取つといて。

それから、その箱も開けといて。中身はテーブルの上に置いといていいから。でもいじっちゃだめよ？

それじゃ頑張つてね。たつくんのことだから心配はしてないけど、三日後のお昼までには帰ってくると思うから。 母

「はあ、またか」

思わずため息が漏れる。

つくづく子ども任せな親で、子としては情けない気持ちになつてしまう。

「たつくん」。

これは少年の愛称。本名は赤崎巧^{あかさき たくみ}。単純な愛称だが子どものときから親からこの愛称で呼ばれている。本人としてはそろそろやめてほしいのだが。

彼は母子家庭の一人っ子で、中学三年生の十五歳。父親は三年前

に不慮の事故で他界してしまった。すばらしい父親であっただけに、当時小学生だった巧には荷が重かった。きっと父のことだろう、あんな母親だからあの世でも心配しているに違いない。

父が亡くなってからというものの、新しい心のよりどころなのか、頼りの母がテレシヨップにはまるようになってしまったことが、巧にとってはもう一つの重荷となり…、しかし、母は仕

事だけは以前と変わらずこなしてくれている。それが唯一の救いだっ

た。

テレシヨップ…。

そういえば、母さんが今度申し込んだのってどんなのなんだろう？ この間はインチキネツクレスだったし。その前は決して高級なんて言えないような包丁だったし。今度はもうちょっとマシなのにしてくれるといいんだけど…。

巧は最近になってやっと、母のテレシヨップ嗜好に対してそんなことを考える余裕が出てきた。と、いうより興味が沸いてきていた。これも母の影響だろうか。

「朝一っていったって、俺が家を出る前に届けにくるかなあ…」

巧が誰もいない玄関に向かってつぶやいていると、

ピンポーン。

ピンポーン。

ピンポーン。

慌しく何度も連続で押されるチャイムの音が家中に響いた。

「テレシヨップだ！」

巧はリビングに戻り、引き出しからハンコを取りつつ声を上げた。

「はい、すぐ行きます！」

ボンツ…！！

玄関に駆け寄り勢いよくドアを開けた…が、思いつきり配達員の顔面にドアが。

「痛って…」

「す、すいません…」

慌てて謝る巧。

「デメエ！痛いじゃねーかコラ！！さっさとハンコ押しやがれこのガキ！！」

ひいひい！怖い、怖いよこの人。

「い、今押しますっ」

しかし手が震えてなかなか押せない。

「早くしやがれっ」

恐る恐る配達員の顔を見ると、真っ赤な顔をしていた。かなり気が立っているようだ。まあ、当然といえば当然だが。

「はひい」

なんとか判を押し、もう一度配達員の顔を覗き見ると、さっきの赤みはどこへやら、飛び切りの笑顔がそこにあった。どうやら熱しやすく冷めやすい性格の持ち主らしい。

「こ、これでいいですか？」

巧が配達員の変貌ぶりに驚きを隠せないまま聞くと、

「あ、良いですよ。いや〜でもこういうの好きですよね、君のお母さん」

と、配達員は突然笑顔で語りかけてきた。

「え？あ〜はい〜そうなんですよ〜もう困っちゃって」

などと適当に返していると、

「いやいやすばらしいですよ！いやね、私も最近ハマってましてね、テレシヨップに」

「は？」

あまりの変化と展開に、巧はただ彼を見つめることしかできなかった。

配達員の目は輝いていた。

「いやいやすみませんね、君にこんな話してもわかんないよね。でも楽しいよ〜テレシヨップは。この箱を空ける瞬間がたまらなくいい！君も一回やってみるといいよ。それじゃ、まあそ〜ういうことでお届けしましたんで。ありがとう！」

と、一気にまくしたてられ、配達員はその輝いた目をしたまま赤崎家を後にした。

「…。なんだったんだ？」

玄関に残された巧は、口をポカンと開けたまま、配達員が家を後にするのを見つめていたが、とりあえずは彼の怒りが治まったことにほっとしていた。

第二話

(2)

リビングに商品の入ったダンボール箱を運んだ巧は、とりあえず中身を確認かめようとしたが、

「ん？」

ダンボールに貼られていたピンクのラベルに目が留まった。ラベルにはこう書かれてあった。

「商品番号17

持ち運び用化粧品箱

発送元 マジヨンナ様」

「母さん、今度はこんなの買ったのか。なんか期待できないなあ」
そもそも、期待以上の商品であったことなど一度として無かったのだが。

「でも…誰なんだろう、このマジヨンナってのは。いつもの通販の会社の名前じゃないし」

ラベルに書かれた見慣れない名前に、巧は疑問の目を向けた。

「ま、いつか。早く中身みよっと。どんなのかな」

送り主への疑問などすぐに消え、巧は慣れた手つきでガムテープをはがし始めた。

ビリビリ。

ビーーーーー。

バリッ。

ビビビーーーー。

「何だよこれ。ちょっと頑丈すぎやしないか？」

妙に頑丈に包装された商品である。はがしてもはがしても中身が出てこない。

その後、頑丈に巻かれたガムテープをはがし続けた結果、元々の

ダンボールの大きさよりかなり小さい箱が出てきた。

「やっと出てきたか。でもこれ、もうどう見ても化粧品箱が入ってる大きさの箱じゃない気がするんだけど…これ運送業者が間違ったんじゃないか？」

十センチ四方のその箱。厚さも薄く、中に入っているものもあまり重みを感じなかった。

「うーん、どうしよつか。なんか開けてはいけないような気がするけど…。でも気になるなあ」

しばらく箱を手にとって考えた巧だったが、

「でも…気になるし。よし、開けよ！」

思い起こして箱からそのモノを取り出した。それは…

「…鏡？」

それは木製の古ぼけた手鏡だった。木目には目立つ傷がいくつが入っており、茶色であつたろう色もはがれている。

しかし、ガラスの面の部分だけは磨かれたようにきれいで、鮮明に巧の顔を映し出していた。

「あれ？」

鏡に映った自分の顔に違和感を感じた巧は眉をしかめてみたが、鏡の向こうの巧はそんな顔などしていない。

「これって…！」

さすがに恐怖を覚え、鏡から手を離そうとしたその時。

鏡の中からよきによきと手が。

「ぎゃあああああああああ！！！」

巧は混乱して叫びまくり、もう手から鏡は離れていたが、鏡は床におちることはなく浮いている。

さらに鏡から出てきた手は伸び、巧の腕をつかんだ。

「うわっ！うわっ！！ぎゃあああああ！！！」

我を失ってつかまれた腕を振り払おうと暴れだす巧。すると。

「痛い痛い痛い痛いって！！！」

「…へ？」

突然のどこからかの叫びに、巧のパニックはすぐに解かれた。ただ、その代わりに多大な恐怖が彼を襲った。なぜならその声は、自分のものとしか考えられないほど似ていたからだ。

「痛いって！そんなに引つ張ったら」

再びどこからか自分の声が。

「ま、まさか…！？」

心臓のドクン、ドクンという音が外に聞こえそうなくらいに大きな音を出し、動いている。そしてさらにその鼓動を早めつつ、巧は恐る恐る鏡の方へと視線を移した。

「おはよう。もうひとりのボク」

第三話

(3)

2

「あれ？」

バサッ。急いで毛布をはぐ。

巧が目を開けた先は、自分の部屋の天井だった。

起き上がってみると、そこはベッドの上。枕もとには恐竜の目覚まし時計。無造作に教科書の積まれた学習机。いつもと何も変わりはなかった。

「なんだ」

ベッドから立ち上がり、大きく背伸びをする。

「ははは…夢か。にしてもリアルな夢だったなあ」

夢と認識してしまえば、今までの恐怖など軽く飛んでいってしまった。体の方はまだなんとなくだるいが。

しかし、その飛んでいったはずの恐怖は、再び巧の元へ舞い戻ってくるのであった。

「どう？調子は」

「へ？」

声を聞いたとたん、巧はゾクゾクと寒気を感じ、全身に鳥肌がたつた。

「まったく。迷惑なもんだよ。いきなり倒れちゃうんだから」

すでに視界にはその声の主が映っていたが、改めてその主の顔を確認する。

そう。

その視線の先には、先ほど夢の中の悪魔と認識したばかりのもう一人の自分が、手にカップを持ち、近づいてきていたのである。

目も鼻も口も、髪型も背丈も、声まで…すべてが、今まで鏡などの媒介を通してしか見たことのない、自分そのものが―しかし自分

とは別のもの―が、目の前に立っていた。

「ほんとにまいつちやったよ。まさか倒れちゃうなんてね。でも…まあ、無理もないか。何も知らない君にとっては。ボクは鏡から出てきたんだしね。はい、これ」

少年はそう言いながら、手に持っている湯気のたったカップを巧に差し出した。

「あ…」

対する巧はカップなど目に入っておらず、ただただ目の前の自分そっくりの少年を見て、驚きの表情を見せている。

「大丈夫だよ。中身はただのお茶だよ。変なものは入っちゃいない」

巧はしばらく少年を見つめていたが、ふと我に返って、再び倒れそうになるのを耐えながら、震えた声で叫んだ。

「な、なんなんだよ、お前は！なんで俺が喋ってんだよ！いやなんで俺があんたなんだよ！いやそうじゃなくて！…あゝ何言ってるか意味わかんないじゃないか！この化け物っ！！」

巧がビビりまくり、混乱しているのを見て、少年はフツと笑った。
「ハハハ…まあまあ、とりあえず落ち着いてくれよ。ボクが化け物？やめてくれよ、そういう扱いをするのは。ボクは列記とした一人の人間。君とは別物だよ。化け物…なんて、それは君から見たらに限ったことだと思うけどね」

「え？」

「他人から見たら、ボクは君そのもの。ボクのことを化け物というのなら、イコール君も化け物ということさ」

「……」

巧がわけがわからず黙っていると、少年は再びフツと笑った。

「正確に言えば、ボクは君とは別物であってそうではないんだけどね」

「??？」

「ま、今はとりあえずこれでも飲んで落ち着きなよ」

少年はなおも黙っている巧に再びカップを差し出す。巧はそれを

受け取りつつ少年を睨みつけた。

「…なんか変なのが入ってるんじゃないだろうな…？」

「さっき聞いてなかったの？何もやましいものなんか入っちゃいないよ。だいたいボクがそんなことをするような人間に見える？」

「見える」

「ハハハ…ってことは、イコール君もそう見える、ってことだね」

「…ム力つくなく、そういう態度。いらないよ、そんなお茶」

カップを少年に押し返す。

「態度悪いのはお互い様じゃないかな」。せっかく入れてきてやったのにさ。…じゃあ、これは僕がいただくよ」

少年は長い口論で冷めてしまったお茶を、巧に睨まれているのも気にせず、口に運んだ。

そのまま、なぜか沈黙の時が訪れた。

少年がお茶をのどに通す音がはつきりと聞き取れるほどに、先ほどとは打って変わって静かになった。

「あの…さ」

しばらくして、少年がお茶を飲み終えたのを確かめると、巧はそれまで続いていた沈黙を裂いた。

「なに？」

「一つ、聞きたいんだけど」

「どうぞ。そりゃ聞きたいことも色々とあるだろうからね」

少年はそう答えると、巧の机にカップを置き、傍の椅子に腰掛けた。

「何でここにきたわけ？っていうか、どうやってここにきたんだよ」

「…一つじゃないじゃん。まあ、いいか。ようやくボクを別のものとして見てくれるようになったみたいだし？答えてあげるよ」

「いや、別にそういう風についていうか…あゝいいや、とにかく教えて」

「おっけー。君が理解できるかどうかは別だけどね」

少年はそう言うと、少し表情を硬くして、再び語り始めた。

「ボクは、向こうの世界…って言ってもわからないか。とにかく鏡の向こうにもう一つの世界があるって思ってもらえればいいんだけど。そこで…」

「ちよつと待った。なんだよ、それ。もう一つの世界って？ゲームじゃあるまいし」

「今それを詳しく言っていると君が混乱するだけだよ。とりあえずはゲームのように思ってもらえれば都合がいいし。それで…」

「なんだよ、都合って！」

「いいから今はちよつと黙っとしてくれる？質問を増やすのはボクの話の聞いてからにしてよ。ボクだって初めてこっちの世界に来て、君に聞きたいことはたくさんあるんだ！」

「…わかったよ。ちゃんと聞くから」

突然の少年のまくし立てに、巧は納得がいかないながらも口を閉ざした。

「ありがとう、それでいいんだ。ボクも整理しながら話すから、ちゃんと聞いてよ？」

そして、少年は巧には理解しがたい、それこそゲームの中でのような話を始めるのだった。

第四話

(4)

巧は少年としつかりと向き合って話を聞く体勢をとった。はたからみれば不自然極まりない光景ではあるが。

巧の目を見て確認すると、少年は口を開いた。

「えっと、どこまで話したんだっけ？」

「もう一つの世界が何たら…って話だったかな」

「そうそう。ボクは向こうの鏡の世界から抜け出した、ある女を追ってきたんだ」

「ある女？」

「うん。彼女の名前はマジヨンナ。…普通は、ボクと君みたいに、向こうの世界とこっちの世界、両方に同じ容姿をした人物が存在してるんだけどさ、…そのマジヨンナって女は、なぜか向こうの世界にしかない、数奇な存在なんだ」

「ふーん」

少年の語る話を理解しきれてはいない巧だったが、その話のうちの一つの言葉が頭に引かかった。

「…マジヨンナ？マジヨンナって確か…」

「なに？」

少年が聞き返したが、巧はそれには耳を傾けず、突然一階への階段をドタドタと下りていった。

「なんだ？いきなり…」

残された少年もわけがわからないまま、とりあえず巧の後を追って階段を下りた。

「やっぱり！これだよ！マジヨンナって書いてある！！」

「なんだって！？」

少年が階段を下りたその先には、リビングにて鏡を取り出した後のダンボールに貼り付けてあった、ピンクのラベルを注視している

巧の姿があつた。

「ほら、これ見てよ」

巧がラベルを指差しして見るように促すと、少年はダンボールに貼られていたそのラベルをビリッと剥ぎ取って見た。

「…これは!!」

「なんだよ、何もそんなに急いで見なくても…」

「このダンボールの中に、例の鏡が入ってたんだよね？」

少年には巧のグチなど耳に入っておらず、今度はダンボールの方を丹念にチェックし始めた。

「そうだけど…鏡はガムテープとビニールで頑丈に包装された中にあったもう一つの小さい箱に入ってたんだ…って、おい、人の話…」
「やっぱりそうか。…だとしたら、ああ…間違いなくマジヨンはこつちの世界にいる」

「…聞けよ、人の話を」

ラベルを見るなり自分の世界に入ってしまったっている少年を見て、巧は苦笑した。何しろそうしているのは自分そのものなのだから。

「ところでさ、これ何？」

少年はなおもペースを崩さず巧に聞いてきた。

「なんだよ、今度は」

苦笑していたものの、その原因が自分と同じ姿の奴だと考えると、少しずつイライラの気分も混じってくる。

少年はコーヒー豆が入っている容器と同じくらいの大きさのビンを振りながら巧の返答を待っている。

「ん？なんだよそのビン。また何か家の物勝手にあさっただろ」

巧が責めると、少年はビンを振るのをやめて巧を睨んだ。

「あのさー、なんか怒ってない？」

「はあ？何で俺が怒んなきゃなんないんだよ」

突然の指摘にイライラが増す巧。

「ほらね、怒ってる」

「だから別に怒ってないって」

「…まあ、それならいいけどさ。急なことで話もわからないだろうし、面白くない気持ちもわかるけど。さっきも約束しただろ？ちゃんと話を聞くて。とりあえず今は我慢してボクに

合わせてくれないかな？ボクには早く終わらせなきゃならない仕事があるんだ。ひと段落したら君の話も聞く。それじゃダメかい？」

「い、いや、ダメじゃないけど…」

「そうか、よかった。それでさ」

「……」

少年の突然の発言とそのリズムに、巧は反論する気にはなれなかった。

「どうかした？」

少年はそんな巧を不思議そうに見る。

「別に。ただ俺は怒ってないから」

巧の返答に、少年はニコツと笑顔になり、話を続けた。

「おっけー。じゃあこの話はこれでおしまい。で、本題に戻るけど。このビンって何が入ってんの？」

「…ま、いつか。自分に腹を立てても仕方がないと、巧は少年の話を聞くことに専念することにした。

「コーヒー豆でも入ってんじゃないの？」

「でもさ、これあのダンボールの中に入ってたんだけど」

「え？」

よく見ると、ビンには黒い包装がしてあり、中に何が入っているのか確認できない。

「そんなに重くはないし、こうやって振ってみると…なんか一個だけ入ってる感じなんだよね」

「おい、あんまり振らない方が…壊れたらどうするんだよ」

そう言つて巧が少年からビンを取り上げようとしたその時。

「誰やこんな中に入れたんは！！早よだせやボケーー！！」

どこからか叫ぶ声が。

「今なんか言つた？」

巧は寒気を感じながらも、少年の目を見た。

しかし、少年は首を横に振り、答える代わりにビンを指差した。

「ビンがどうしたんだよ」

「…たぶん、この中からだよ、今の声」

「はあ？そんなわけないじゃん、ちよつと貸してよ」

巧は少年からビンを受け取り、少年と同じように振ってみた。壊れると（？）いけないので今度はやさしく。
すると。

「誰やアホー！やめろー目が回るー」

再び声が。しかし今度は明らかにビンの中から声が確認できる。

「…すんごく嫌な予感がするんだけど」

巧は寒気だけでなく、鳥肌が全身に立っていた。倒れる前に感じたあの感覚がよみがえってくる。

「何してんの？早く」

少年は顎でビンを開けると指図する。

「え？」

「え、じゃなくて、早く開けてよ、それ。わかってるんだろ？声の元はそこなんだから」

「いや、そんなことはわかってるけど、でも…何が入ってるかわからないし、むやみに開けたら…」

青ざめた顔の巧の様子に、少年はニヤリと笑い、巧を睨んだ。

「ははーん、君、恐いんだ？たかがビンを開けるのが？声が聞こえただけなの？そんなの子どもでもできるのに」

「な、なんだよそれ。別に恐いとかじゃなくて、開けたらどうなるかわかんないし危険っていう意味で…」

「つべこべ言わずに開けてよ」

少年の鋭い切り返しに巧は動揺したのか、

「くそー信じてないな…いいや、開けりゃいいんだろ、開けりゃ。どうなっても知らないからな！」

そう言いつつもブルブルと手は震えていたが、勢いでビンの蓋を

開けた。

クルツ、クルツ、クルツ。

カラカラカラーン。

勢いで蓋はどこかへ飛んでいった。

「ふう。開けたよ。ほら見…ぎゃあああああ！！」

蓋を開けて中身を見ようとした瞬間、何かがビンの中から巧の顔を飛び出していた。

「ぎゃあああああ！！」

今度は少年の方が叫びだした。

「出た！出た！！やつは出た！！」

二人でパニックしながらリビングの中を走りまわっていると、何か生温かいものが巧の足に触れた。

「ぎゃー！ぎゃー！！なんか足に触った！！」

今度はさすがに気絶ほどしないが、鏡の時と同じような状況。

「あ、あ…それ…」

少年が巧の足の付近を見てそういった時、その足に触れていた「何か」が、突然声を発した。

「何やギャーギャーうるさいわ！叫びたいのはこっちの方や！」

「…え？」

巧は恐る恐る足元のそれを見ると、ついに白目をむいて倒れ始めた。

「おっと！」

そこを倒れる前に少年が受け止めた。

「ハ…ハハ…、喋ってるよ…こりややつば夢だ。ハハハ…」

巧は受け止められながら口をパクパクさせ、半分壊れていた。

「まさか…。動物が喋るなんて…」

少年も目を大きく見開きながら、それを凝視している。そう。

巧の足元で声を発した、その声の主は…、なんとネズミであった。しかも、お洋服つきの。

第五話

(5)

3

三角ピンクのお耳。

小さな口の隙間からはみ出した、かわいらしい前歯。
くるりんと曲がった細い尻尾。

なぜかどこぞの騎士様のようにマントを羽織った出で立ち。

現れたのは、これまたなぜか関西弁(?)を喋る、銀色の毛を持ったネズミだった。

体長は十センチ程度といったところか。

「遅いわ!!ほんまに。もう少し開けるのが遅かったら死ぬところ
やったわ」

ネズミは巧の足に乗ったまま、不機嫌そうな顔(?)でブツブツ
と文句を言っている。

「あ、あの…」

巧は気絶しかけていた状態から何とか立ち直り、ネズミに恐る恐る
話しかけてみた。

「なんや!？」

ネズミは巧の声に反応するや否や、鋭い眼差しで巧みを睨みつけ
てきた。

「ひいっ!!ごめんなさい!!」

驚いて飛び上がる巧。同時にネズミもバランスを崩し床に転がっ
た。しかしネズミはすぐに体勢を立て直した。

「痛たた!わいが何したつちゅうねん!ひどい仕打ちやな」

「ハハハ、臆病だね、君は」

それまで黙って見ていた少年は、笑いながら床に立っていたネズ
ミの尻尾をひよい、とつかみあげた。

「こゝんなたかがネズミにびくびくしちゃってさ」

「な、なんだよ、自分だつてさつきはギャーギャー叫んでたくせに……」

「え？そうだった？まあどっちにしても君の臆病さには勝てないけどね」

「……。相変わらず一言多いな……ほんとに俺なのか？こいつ」

「ふん……」

少年は巧がムツときているのも、グチをたらしているのも全く気にせず、つかんでいるネズミをじっと見つめている。

「まさかとは思ったけどさ……こんなところで再会するとはね」

少年にそう言われたネズミは、

「はあ？なんやお前……」

と言いかけたが、少年の顔を見つめながら目を大きく見開いた。

「あゝあゝああ！？」

その様子を見た少年は、フツと笑って今度はネズミの尻尾をつかんで振り回し始めた。

「気づくのが遅いよ、ニージョ」

「ぎゃー！！！」

少年はネズミをひとしきり回した後、彼をひよい、と巧のほうへ投げてよこした。

「お、おつと……」

巧があわててキャッチする。

「や、やめや！この悪ガキが！！わいを殺したかてええ事ないで……」

ネズミはあれだけ回されたのに目を回すどころか、キャッチした巧の手に噛み付いてきた。

「い、痛い痛い痛い！！俺じゃないって！！」

ネズミはそれを聞いて一瞬辺りを見回して、巧と少年の姿を捉えたが、再び巧に噛み付き始めた。

「なんや！？分身の術か！？わいですらまだマスターしてへんっちゃうのに……バカにしとるんか！このっ！このっ！！」

「痛っ！！だから！違うつてば！！」

「物分かりが悪いな、ネズミさん」

様子を見ていた少年は再びフツと笑い、巧の手の上のネズミの尻尾をつかみ、顔をぐつとネズミに近づけた。

「相変わらず落ち着きがないんだから…分身の術なんか使えるわけではないでしょうが。ばーか」

その言葉に感化されて、少年に視線を移していたネズミも眉間（？）にしわを寄せた。

「ミツク…お前も相変わらずやな、その減らず口は。どついたるわこのイヤミボーイが！！」

ネズミは少年をどつこうとするが、尻尾をつかまれているのでどうしようもない。

「ははは…ばーか！ばかニージョー！！」

はたから見るとペットとその飼い主がじゃれ合っているように見える彼らだが、本人たちは本気である。

「あの…さあ、どういうこと？？」

取り残された巧の頭には無数の疑問符が。

「無駄だつて。ああ…不憫だねえ、ネズミの姿つてのはさ」

巧質問を聞いているのかいないのか、少年はそう言いながらネズミの尻尾を持つてプランプランと揺らして遊んでいる。

「うわ、やめやあ！後で絶対しばいたるっ！！」

ネズミの方は自分のことで精一杯で巧の言うことなど耳に入っていないようだ。

「だ…から！聞けよっ！！いったいどういうことなんだつてば！！」

顔を赤くして叫ぶ巧ののほろを少年はチラリと見たが、すぐにネズミの方へと視線を戻し、ネズミの尻尾をプラプラさせながら一言つぶやいた。

「見てのとおりだよ、ボクたちは知・り・合・い」

「いやさ、それは見てればわかるけど、何で知り合いなわけ？」

巧がなおも詰め寄る。

すると少年はプラプラさせるのをやめ、手のひらにネズミをちゃんと座らせた。

「それ、話さなきゃダメなわけ？」

「ダメなわけ！」

巧が少年を睨み付けながら言うと、少年は一瞬めんどくさいなあといった表情をした後、ネズミを見ながら答えた。

「マジヨンナのお付き人なんだよ、コレは」

「コレとかいうな、コレとか！！」

言われた途端にネズミは再度少年に反撃を試みたが、まるで効果はない。

「付き人……？」

そう言われても、大体マジヨンナという人物がどういう人物なのかも知らない上に、その付き人であるネズミと少年との関係になどまったく結びつかない。

あ、もしかしてこういうことか。

「じゃあさ、お前もそのマジヨンナとかいう人の付き人なわけ？」

思いついたままを聞いてみたが、少年は違うところに引っかかった。

「お前？そういう呼び方はボクは嫌いなんだけど。ボクにはミクタっていうちゃんとした名前があるわけだし、そこんとこよろしく」「ミクタ……？プツ…俺の名前を逆に読んだだけじゃん！」

巧を逆から読んだミクタという名前。それを真顔で言う少年を見ていると、おかしくて吹き出した。その様子を見て少年は、

「何がおかしいんだか。ボクからしたら君の名前のほうがおかしく感じるけど」

と、巧を睨んだ。

「それを言うんだつたらそっちこそ、君とかいう呼び方やめろよ」睨みあう二人をみて、ネズミが声を上げた。

「なんやそんな好きないように呼んだらええやんか！お前が巧でこ

いつがミック。それでええやろ？で、この話はこれでしまいや」

「あ…うん、わかったけど、なんでミック？」

体のわりに大きなネズミの声に圧倒されて巧は反射的にうなづいたが、同時に疑問も口から出てきた。

「あだ名」

「は？」

少年がポツリとつぶやいたのが聞き取れず、巧は聞き返した。

「だから、あだ名だよ！」

突然大声を出す少年。

「なんだ、あだ名か。そんなに怒鳴らなくても…いいじゃんあだ名くらい」

巧の少年への反応を見て、ネズミは笑い出した。

「っははははは。そうやんなあ。気にしすぎやミックちゃん！これから愛情込めてそう呼ばせてもらうで」

「…好きに呼べば。そんなことよりも、もういいわけ？説明しなくても」

少年…ミクタはネズミなど相手にせず、ふっつと息をつくと巧に聞いた。巧もはつとして姿勢をなおす。

「え？…ああ、そっか。このネズミがマジヨンナって人の付き人で、確か、ミックがそのマジヨンナっていう人を追ってるんだっけ？…てかさ、自分と同じ姿してる奴を名前で呼ぶって変な感じ」

「はいはい、もう好きなように呼べばいいじゃん。んで、そう。ボクはマジヨンナを追ってるんだよ。だからこのネズミは、その重要な手がかりなんだよね」

と、ミクタが喋っていると、今度はネズミが怒鳴った。

「あんな〜、ネズミネズミでうるさいわ！わいにもニージョっちゅう名前がちゃんとあるんやで」

「あ、ごめん。ニージョね。了解。それでミック、何でそのマジヨンナって人を追っかけてるわけ？」

「…無視かい。やっぱ同じ顔やと似とるわ」

巧の流すような反応に、ため息をつくニージヨ。

そんなニージヨの姿を横目に、ミクタが話し出した。

「マジヨンナを追ってる理由ね…面倒だからまた今度にしない？君にもしないといけないことがあるんじゃないの？あんまりゆっくり話してる時間はないと思うけど」

「なんだよ…結局俺のことは君呼ばわりか…って、ええ！？」

ミクタを睨んだ巧だったが、彼の視線の先の時計を見ると、それどころではないことを悟った。

「九時！？もう学校始まってんじゃない！！」

時計の針はもうすぐ九時を指すところだった。

「そういうこと。まあ今から行ってもどうせ遅刻だけだね」

そう言ってミクタはフツと笑った。

「なんでもっと早く言ってくれなかったんだよ…。いや、ちょ、ちよつと待てよ？俺が学校行ったらミツクたちはどうするんだよ？」

泣き顔になったりハツとした顔になったりりの巧。

それに比べ、ミクタは全く問題ないよといった感じの表情で口を開いた。

「自分がぶっ倒れてたくせに…。まあ君が帰るのを待ちながら、この家でゆっくりさせてもらうよ。このネズミとも話があることだしね」

「ネズミやないて言うてるやろ！」

すかさずニージヨが反論するも、ミクタは相変わらず相手にしていない。

「それに、君のお母様はしばらく帰ってこないみたいだし？問題ないと思うけど」

「何でそれ知ってるの？」

「え？ここに置いてある手紙を読ませてもらったただけだけど？」

「あ…そうか…。いや待てよ、やっぱりここにいてもらうわけにはいかないよ！だってここにいられちゃ何されるかわかんないし…」

そのままミクタの言うことに応じそうになり、慌てて考えなおす

巧。しかしミクタはすかさず答えた。

「それを言ったらどこにいたって同じだと思っけど？なにしろボクと君は同じ姿をしてるんだからね」

「あ…」

言われた巧は口が開いたままになってしまった。

ミツクは笑って、

「ま、ボクたちはここにいた方が一番問題ないってこと。大丈夫。君が心配するようなことはしないと思うから」

と、ネズミをテーブルの上に置いて二階への階段を登ろうとしたが、そこに巧が待ったをかける。

「ちよっ…なに勝手に二階に上がろうとしてるんだよ！」

そう言ったが、ミクタはニヤツとして、

「別にいいじゃん？だってボクは君、なんだしね」

と言いながら二階へ行ってしまった。

…。

「はあ…。なんなんだよ…」

一連の出来事のために息が漏れる。学校に行ったとてミクタ達のとが気になって仕方がないだろう。すでに行く気力がかなり削がれてしまっている。

頭を悩ませていると、それまでじーっと巧をみていたネズミの二ージョが巧の肩にピョン、と乗ってきて言った。

「ま、学校行つてきいよ。ミツクの奴はわいがちゃんときとくし心配せんでもええで」

巧はそう言われ、しばらく二ージョを見ていたが、やがてしかめっ面になり、

「ネズミに言われても説得力がないよ…それに、あんたもじゅ…ぶん怪しいんだけど」

と、再びため息をついた。

「なんやて！？お前もほつといたらあいつみたいになってまうわ。こう見えてもわいはな…」

「あゝ、もういい！！いいよ、学校行くし」

巧は二丁ヨが食いついてくるのを制し、ミクタの登っていった階段をぼーっと見つめていた。

まさかこんなことになるとは…ネズミと会話している自分がばかばかしく思えてくる。

学校へ行つた後のミクタ達のことは気になるものの、巧はとにかくこの状況から抜け出したい一心だった。

第六話 学校にて（1）

学校にて

1

キーンコーンカーンコーン。

ここは七色町立、百合が原中学校。

校内に授業の終わりを告げるチャイムが鳴り渡る。

「巧くん、お昼ごはんは？」

「うん……」

巧は頷きながら、まったく語りかける声に耳を傾けていなかった。席に着いたまま、机の上の物も片付ける気配がない。

「巧くん……！」

「え？……あ、ああ、ごめん。なんだっけ？」

大きな声を出され、ビクツとして声の主の方へ顔を向ける。

「もう……どうしたの？今日の巧くん、なんか変だよ？学校遅刻してくるし、ずっとそわそわしたりばーっとしたりしてるし」

心配そうな顔つきで巧に語りかけているのは、巧と同じクラスの女の子で、名前は立花希色。たちはなきいろ

パツチリとした目に、肩までほどの長さの髪の毛の両側をゴムでくっつけたツインテールがチャーム・ポイント。

小学校が同じで、部活動も共にテニス部なこともあって、二人は仲がいい。三年生の十一月なので、部活はすでに引退済みだが。一、二年生の時は違うクラスだったが、三年生になって同じクラスになった。それからは以前よりよく話すようになった。

「ごめん。なんでもないよ」

なんでもないわけがなかったが、巧はそう答えるしかなかった。朝に起きたことを言っても、信じてくれるわけがない。

言わずともそんな心情は少なからず伝わっていたようで、希色は腰に手を当てて、巧を軽く睨んだ。

「絶対なんかあったでしょー！顔にそう書いてあるよ。なんか今は言いたくなさそうだから聞かないでおくけど、私で聞けることだったら言つてね、相談乗るから」

そう言つて希色はニコツと笑った。

希色は昔から他人のことをよく気遣う子だった。少し行き過ぎて考えている感もあるが、それだけ自分のことを心配してくれているということだ。そう思うと少しうれしくなり、今の気分も紛れてくる。

「ありがと。大丈夫だから」

巧は自然と笑顔になつて答えた。

それを見た希色も安心したようだった。

「そつか。よかった。ちよつと心配だけど…巧くんがそう言つんだしね。」

ところで、今日はお昼ご飯何も持ってきてないの？

「え？…ああ、バタバタしてたから何も持ってきてないよ。今日は母さんがいなかったから、弁当も作ってもらってなかったし」

かといつて母親も忙しい身なので、毎日弁当を作ってもらつていたわけではないが。

そつえば朝から何も食べていない。ランチのことを考えると急に腹が減つてきた。

「えっ、おばちゃんいないの？じゃあ、また独り？…寂しいね」

巧が母子家庭であることは希色も知っている。小学校の卒業も近い時に巧の父が亡くなり、その時からしばらく、巧の落ち込んだ姿を目の当たりにしていた。

あれから時が過ぎ、巧も父親のことで沈んだ様子を見せなくなつたが、両親も姉妹もいる希色からすれば、家に帰って独りという巧のことを考えると、さぞや寂しいだろうと思う。

「ああ…まあ、もう慣れたよ。それに、たまに独りつてのも悪くな

いよ」

と言いつつ、家に残してきたミクタと二ージヨの姿が一瞬浮かんだ。

「でも…あ、そうだ、今日巧くん家で勉強会しようよ！浅葱くんとかも呼んでさ」

浅葱というのは巧の親友である。クラスも部活も違うが、小学校時代からの仲である。

「え、勉強会！？…あ、えっと、今日はダメなんだ。いや、ダメっていうか…ちよつと今日は独りになりたい気分で」

咄嗟に変なことを言ってしまった。

希色も気を使って言うてくれているのだろうが、あの二人（一人と一匹か）が家にいることを考えると、とても「はい」などと返事できない。

案の定、希色の表情が一変した。

「独りになりたいって…巧くん、やっぱり変だよ。今日は一緒に帰ろう？みんなで勉強会しようよ、ね？うん、もうそれで決まり！」

「え、ちよ、ちよつと待つてよ！俺は来ていいなんて一言も…」

この時点で巧の中で嫌な予感が大きく膨らむ。

「も、遠慮しないでいいから。こんな時に独りでこもってちゃダメだよ！後で浅葱くんにも声かけとくから」

「いや、そうじゃなくて…」

巧の言葉も、もはや人助けの決意を固めた希色には無意味だった。

「あ！話してたら結構時間経っちゃってる。お弁当持ってきてないんでしょ？売店にパン買いに行こつ！早く行かないと売り切れちゃってるかも…！」

と言つて、希色は小走りで教室を出て行ってしまった。

……。

絶対に何か勘違いをしている。

希色は人を思いやれるといういいところがあるのだが、少し突っ走ってしまうのがたまにキズ、である。

「あゝ、どうしょ…」

結局希色の気迫に押されてしまっって何も言えなかった。というか言う隙を与えてくれなかった。

帰りまでになんとか上手いことごまかして、家に来ないようにしないと…。

希色が教室の入り口に戻ってきて、「早く早くっ!」と手招きをしている。

「はあ…」

今日何回目のため息だろう。今日は厄日だ。

自分を急かしている希色の姿を見ると、一時忘れていた空腹もよみがえり、とりあえずはそれを満たすことにして、巧は席から立ち上がった。

しかしこの後、厄日だと思うにはまだ早かったことを思い知らされるのだが…。

第七話

(2)

2

放課後。

巧たちは、すぐに下校できないでいた。

教室の黒板には、いくつかの項目が箇条書きで書かれている。

- ・ たこやき
- ・ 焼きそば
- ・ わたあめ
- ・ ソフトクリーム
- ・ 焼きおにぎり

どれにしよっかな…。

巧が考えていると、前に立っている学級委員の女の子が、ざわついている場を静めるように声をあげた。

「みんな決まった？ ささつと決めて早く帰ろっ！ 文化祭の当日までそんなに時間ないし、今日決めてしまおうよ」

そう、今月の半ばには文化祭が行われるのだ。

受験前で忙しいこの時期に、文化祭。

中には文化祭なんてやってる暇があったら勉強がしたい、という人もいるのだろうけれど、これは息抜きをしなさいっていう学校側からの配慮なのだろう。

実際文化祭があるからといって、そのために多くの手間をかけなければならぬわけではない。ここの学校では、一年生は展示物・出し物の製作、二年生は劇、三年生は出店、というように決まっている。出店は売り出すものを決めて、前日に材料をそろえて、当日作って売るだけ。なので文化祭に向けての準備というものはあまり

なく、自分たちに負担はかからないのだ。

それにしても代わり映えのしないやつばっかだな…。

確かにどれも定番だが、珍しいものをやろうとして失敗するよりもマシだ。文化祭という名目上、どっかの寺に軒を連ねる屋台とは違うのだから、必死にならずともある程度は売れる。当日までに、学内用のチケットをみんなで協力してどれだけ売りさばけるかが売り上げを左右する。

別にどれでもいいんだけどな！。

そんなことよりも、どうやって希色ちゃんたちが家に来ないようにすればいいのか…。

そんなことを考えながら、何気なく教室の外の廊下に目を向けると、そこには親友の浅葱亮介が廊下の壁にもたれて立っていた。

短くカットされた髪型で、額のすぐ上につむじがあるのでいつも前髪が立っているのが面白い。陸上部を引退したての彼は、どこにでもいる青春真っ只中といった感じの少年だ。

亮介と目が合うと、彼は「よっ！」といった感じで手を軽く挙げた。巧はそれを見ると、黒板の方を顎で指して、待たせていることを目で謝る。亮介も顔をしかめながらウンウン、と頷く。

亮介とは帰りの待ち合わせは特にしていないが、部活がなくなっただけからは、帰るタイミングがあったときはよく一緒に下校している。今日わざわざ待つてことは…希色ちゃんに誘われたんかな？

そう思って今度は前の方の席に座っている希色の方を見ると、彼女は隣の席の女の子と、とてもうれしそうなニコニコした表情で喋っていた。そういえば希色はこの手の行事ごとがとても好きなのだった。いや、希色に限らず女の子は皆そういうものなのだろう。

黒板に視線を戻し、焼きおにぎりにでもしておこうかと考えていると、友達と話していた希色が手を挙げて言った。

「ねえ、韓国風チヂミってというのはどうかな？すごくおいしいし作り方も簡単なんだよ」

するとざわついていた教室内がしんとなった。

「チヂミって… お好み焼きみたいなのだっけ？」

黒板の前の学級委員の女の子が聞き返す。

「そうそう、ちょっとピリツとしてておいしいんだよ」

希色は笑顔を満開にさせて言った。

しかし学級委員の子は半信半疑な顔。

「でも、どういう風に作ればいいの？なんか味とかイメージがわからないし…」

「あ、それだったら大丈夫！作り方もわかるし、もしななかったら私が作ってきて持ってきててもいいよ？」

希色がそう言つと、それまで教室の端の方で黙って聞いていた担任の先生が、ぽろっとつぶやいた。

「私はその韓国風チヂミ、食べてみたいですね」

中年男性でひよろつとした体格の先生は、眼鏡の位置を直しながらニヤニヤしている。

それ聞いた学級委員の子は、しめた！というような顔をしてみんなに向きなおった。

「…って先生もいつてるんですけど、チヂミで出店したいっていう人は、手を挙げてください！」

その子が言つと、ほとんど全員が手を挙げた。巧もそれに便乗する。

「じゃあ、チヂミってことで決めちゃいますっ！立花さん、今度作り方とか教えてね」

学級委員の子が黒板に「チヂミ」と書いて、赤いチョークでその文字を囲む。

でもみんな単純だよな！。希色ちゃんには悪いけど、たぶんみんなどれでもよかったんだろうな…。

そう思つてもう一度希色の方を見ると、本人は隣の席の友達と「やったね！」などと言つてはしゃいでいた。

ああ…それにしてもなんて言つて断ろう…。

「そういうことなんで、今日はこの辺で文化祭については終わりに

します」

と、学級委員の子が言い終わらないうちに、みんなぞろぞろと身支度を整えて席から立ち上がりだした。

そこを先生が「あ、ちょっとちょっと」と止める。

「文化祭もいいですけど、来週には小テスト、来月の始めには期末テストがありますからね。入試も近づいてきてますから、気を緩めすぎないようにお願いしますね、じゃあ今日はこれで終わります。さようなら」

先生がそういうと同時にほとんどの生徒が教室の外へ詰めかけ、教室内はあつという間に静かになり、密度が薄くなった。

巧はまだ机の上のものをしまつてなかったので、まだ自分の席で荷物整理をしていた。

そこに亮介が廊下からやってきた。

「三組は韓国風チヂミか」。立花さんも頑張るなあ。二年の時も文化祭で劇、頑張つてたし」

「劇か、希色ちゃんって何の役だったっけ？」

巧は亮介の声を聞いて、鞆に荷物を入れながら口を動かす。

「あれ、覚えてないんかよ。かわいそうに。なんか成仏できなくて霊の役だったじゃん」

「そうだったっけ？」

と言いながら思い出した。希色ちゃんが成仏できない少女の霊の役で、その子を成仏させるために、同じ年頃の学生たちが一緒に遊んであげる、っていう話だったっけ。

巧が去年のことを思い出していると、希色がこちらに駆け寄ってきた。

「…ごめんごめん、しおりんも誘ったんだけど、塾があるからだめだって」。しおりんというのは希色ちゃんの友達の蘇比詩織ちゃんのことだ。

「そっか残念、せっかく蘇比さんと一緒に勉強できるかなって思ってたのに」

亮介がボソツとつぶやく。

それを聞いた希色が目を大きくして驚いた。

「え！？浅葱くんって、しおりん狙ってるの！？」

その言葉を聞いた亮太も驚いた。

「え？い、いや、そんなんじゃないって。女の子がいっぱいいた方が楽しいかなって思ってた」

「あ…そっか、ごめんね、早とちりして。でも…もしほんとにそういうんだったら、ちょっと面白かったのになあ」

希色はそういつて舌をペロツとだした。

「ははは…全然違うからそんなに期待しないでいいって」

亮介が照れ笑いでいたが、希色はその横で黙り込んでいる巧の方が気になった。

「…どうしたの？巧くん」

希色の声にハツとなる巧。

「え？…ああごめん、ちよつと考えごと。あ、あのさ…」

と言葉を続けようとしたが、希色にさえぎられた。

「もう、ほんとに今日はどうしちゃったの？」

「だから、別にどうも…」

と反論をしようとしたが、これもさえぎられた。

「え、今日はって、タクがどうかしたん？」

にやけ顔も元に戻り、空気の変わり様に気づいた亮介は巧に視線を移しながら希色に聞いた。

「うん…それがね、さっきちゃんと説明してなかったね。巧くん、今朝からずつと変なんだよ。遅刻してくるし、ぼーっとしてるし。だから今日一緒に勉強しようって言ってるんだけどね」

それを聞くと亮介は腕を組んでため息をついた。

「…そういうことか。なんだよ、そーいうことなら早く言えよ！」

そして巧の方をボン！と突いた。

「痛っ！なんだよ、だから別に何でもないって…！」

そう言っても、疑った目つきで巧を睨む亮介。

しばらく睨んだ後、軽く伸びをして亮介は一人で頷いた。

「よし！まあ何でもあるにしろないにしろ、今日はタクの家で勉強会な！」

「え？」

巧が口をぽかんと開けていると、亮介はもう一度、今度は巧の腹をポン！と突いた。

「ぐはっ…亮介、痛いって」

そんな巧のセリフなど亮介は聞いていない。

「ま、どっちにしても今日は勉強するつもりだったし、今日は家でひとりなんやろ？みんなでやった方が楽しいし」

腹を押さえながら、それで集中してた試しがないくせに、と巧は思った。

「うんうん、私が巧くん家でチヂミ作ってあげるからさ、ね？」

しばらくいきさつを見ていた希色もニコニコして、俄然乗り気だ。

「いや…だからさ…」

そう言いながらもその声は小さくなり、この場では反論する気がなくなってしまった。

ああ、こんなに友達思いの友を持って、俺は幸せだよ…。

はあ…。

何度もついた深いため息をもう一度つきながら、家までの帰り道でどうやって断ろうか、本気で悩む巧であった。

第八話

(3)

3

帰る時には雨はあがっており、道中もう一度降り出すことはなかった。これで長引く雨も休みにしてほしいものだが。

それにしても…結局言い出せなかった。

あれこれ考えながら、亮介の話の相手をしていたら、いつの間にか家の前まで来てしまった。

希色ちゃんはチヂミの材料を買ってから後で家に来ると言っていて、途中で別れた。

やばい。まずい。

「なんだよ、こんなところで立ち止まって。はやく家ん中に入ろうや」
すでに玄関のドアの前まで行っていた亮介が後ろを振り向き、急かす。

「うーん、何て言えばいいんだ？」

「あ、あのさ…」

巧が言おうか言つまいかモジモジしていると、亮介が巧の元へ来た。

「何？どうしたん？」

「いや、それがさ…」

巧の様子に、亮介は巧の肩に手をポン、と置いた。

「…タク、やつぱ立花さんの言うとおり今日は何か変だって。なんかあるんだったら、俺に言ってみ？」

「ご、ごめん…」

これ以上変な誤解をさせておくわけにもいかない。もうこれは事実を言うしか…。

「実は…さ、亮介。今、家に入るとやばいんだ」

「は？」

亮介の眉がつりあがる。

「だから、今家には、もう一人の俺がいて…とにかくやばいんだって！今入ったら！！」

「なんだ、それ？どういう意味？わかるように説明してよ」

亮介はそう言っ、巧の肩に置いていた手で、今度はボン、と肩を叩いた。

「痛っ！もーその癖やめろって！…言ったとおりだよ。家の中にもう一人の俺がいるんだ」

巧が真顔でそういうと、亮介はゲラゲラと笑い出した。

「っはははは…。なに言ってんだよ？タクちゃん、大丈夫ですか？頭おかしくなっちゃった？」

「ほんとなんだって！！今朝届いたテレショップの商品から、自分がニユツって出てきたんだよ！」

必死に説明するが、亮介はますます腹を抱えて笑う。

「ハハ…ハア、ハア。マジ笑えるよ。…あのさあ、タク。もうちょっとわかりやすい嘘つけって。別にさ、エロ本とかあったって俺は気にせんし？立花さんが来る前になんとかすれば大丈夫だって」

……。

何を言ってるんだか。はあ、やっぱり信じてくれるわけないよなあ…。

巧がうつむいてい、亮介は再び扉のところまで行き、おいでおいでと手招きをした。

「おい、いいから早く入ろっや。また雨が降ってくるかもだしさ」
誰の家だよ、誰の！！まったく。

あゝあ、結局こうなるのか。…亮介には悪いけど、ありのままを見てもらうしかないな。そんでもって、お互い自己紹介でもしてみらうか。

そう思っ、と急に笑えてきた。

巧が一人でニヤニヤしているのを見て、さすがに亮介も少し心配になってきた。

「タク、マジで大丈夫？俺、ちょっと心配になってきたんだけど」
「え？ああ、大丈夫だって。はは、なに心配してんだよ。入る入る」と、巧も玄関に向かう。

「さっき入るなって言ってたじゃんけ…変なやつ」

「あ、さっきのこと？気にせんでいいよ。亮介の言うように大したことじゃないし」

亮介がじろつと睨んでいるのも気にせず、巧は玄関の扉の鍵を開けた。

4

「ただいまー」

と、言ってみたものの、返事はない。誰かがいる気配もない。

「お邪魔しまーす」

亮介が靴を脱いで入ってくるのも待たずに、巧はリビングに急ぎ、ミクタたちがいないかを確かめた。

しかし、リビングには誰もいない。

「俺の部屋にいるのかな…？」

そう思って二階に上がろうとしたが、亮介がついて来ようとしたので、

「あ、勉強一階でするし、教科書とか取ってくるから座って待つといて」

と言つてとめておいた。

「お？やっぱ二階にエロ本でもあんの？早く隠しとけよ」

などと、階段を上っている間に亮介が言っていたが、無視してそのまま上った。

にしても、亮介がエロ本見たいとかいってついてこなくてよかった。ていうか、んなもん最初からないけど。幸いリビングにミク達はいなかったし、このまま二階にいてもええなとかやりすごせるかもしれない。

そして、自分の部屋をのぞいてみる。しかし、

「あれ？」

巧の部屋にもミクタ達の姿はない。

「うーん、母さんの部屋かな？」

と思つて母の部屋ものぞいてみたが、そこにも二人（一人と一匹）の姿はない。

……。

どうということなんだ？

自分の部屋に戻り、立ち止まって考えてみる。俺が出かけている間に、家を抜け出していったつてこと……？

やばい。そんなのやばすぎる！俺の知らないところで俺が行動してるつてことじゃないか。考えただけで鳥肌がたつ。

一人で考えていると、痺れを切らしたのか、亮介が二階へ上がってきた。

「もうエロ本隠した？思つたんやけどさ、せつかくやしエロ本見してくれん？」

と巧の返事を求めたが、巧はボーっと腕を組んで突っ立った状態で、亮介が上がってきたのに気づいてないようだった。亮太はここぞとチョップをくらわそうとする。

しかし、巧はそれを腕を組んだそのままの体勢でヒョイ、と前に出てかわす。

「ありや」

攻撃をかわされた亮介は悔しそうな顔をしながら、そろそろと巧の前に移動し、両手を揃えて出して「ちょうだい」のポーズをする。

巧は最初から亮介が来ていたのに気づいていたのか、チラッと亮太の方に目だけを向けた。

「なに？」

と巧が聞くと、亮介は頭をかきながら、

「だからー、エロ本」

と両手をスリスリしてねだった。

「は？そんな家にはないよ。亮介が勝手に勘違いしてただけだ
て」

「またまた、そんな隠さんでいいって。別に恥ずかしくないから」
なおも亮介が粘るが、巧はその手をペシッと叩いてやった。

「だから、ないもんはないし。ほらほら、一階行つといて、一階！」
そのまま巧は亮介の背中を押し、階段を下りさせた。

「なんだよも、今度来たときタクの部屋荒らしてやる！」

と階段を下りていく亮介の声を聞きながら、巧も机の上にあった
教科書を何冊か取り、亮介の後に続いて一階へ下りた。

どうしたもんかな…。

ミクタ達がどこにいるかわからない以上、対処のしようがない。
それに突然帰ってこられたら、それこそおしまいだ。

「タク、なんか飲み物ない？」

さっきの工口本の欲はどこへやら、亮太はおとなしくリビングの
テーブルの席に座り、鞆から教科書を出し始めていた。

「あ、お茶だったらあったと思う」

巧は冷蔵庫から作り置きしていたお茶を取り出し、キッチンの食
器洗い機にあったコップを二つ並べ、お茶を注いだ。

「サンキュ」

亮介はお茶を受け取るとすぐにグビグビと飲み干し、今度は自分
でコップにお茶を注いだ。

巧も同じようにお茶を一気に飲む。

すると、飲んだと同時に尿意をもよおしてきた。

「ちよつとトイレ」

「ああ、うん」

亮介は二杯目も飲み干そうとしていた。そんなに水分が欲しくな
る季節でもないのに。新陳代謝がいいのだろうか。

ジャー。

用を足して水を流す。

「ふう」

なんだかこの瞬間が落ち着く。問題が起きた家の中だというのに、この空間は別のものに思えて、少し安心できた。

手を洗い、トイレの中に備えてある小さい鏡を見る。

「もう一人の俺、か…」

いつそのまま二人が戻ってこなければいいのに。そんなもってアレはやっぱり夢だった、とかだったら。

そう思いながら鏡を見つめていると。

「ん？」

今、鏡の中の自分の顔が、ひとりでに笑ったような気がした。

「ま、まさか…！？」

第九話

(4)

* * *

時は少し戻って。

ここは七色町のとある場所のスーパー、「アイドゥーアイドゥー」

。

希色はチヂミの材料をそろえるために、買い物に来ていた。

「小麦粉は買ったし、唐辛子もオツケーでしょ。あ、飲み物もいるよね」

チヂミの材料だけそろえるつもりだったが、ついつい色々とかごの中に入れてしまっている。

「フフフン、フン、フン…」あとは何だっけ…ニラだっ」

店内には最近ヒットしている曲「なごみ雪」がかかっている。それにしてもどうしてスーパーのBGMって歌の声がはいってないんだろう、と希色はいつも思う。

ニラを取りに野菜売り場の方へ行くと、腰まで届きそうなたややかなストレートの赤毛が魅力的な、どこの国の人であろうか、とても美しい女性がじゃがいもにとらめっこしていた。

わぁ…きれい…。

後ろ姿だけなのに、思わず見とれてしまう。背も高くスタイルも抜群で、非の打ち所がない。

私もあんな風になれたらなあ。

そう思いつつも、野菜を取りに来たことを思い出し、ニラの所まで足を運ぶ。

希色がニラを手に取りうとしたそのとき。

「ハイ、ガール？」

と声がし、希色の前にニュツと顔が出てきて、目を覗き込まれた。「え？え？」

すぐに目の前から顔がヒヨイと消え、横を振り向くと、そこには先ほどの美女が希色に微笑みかけていた。

そして、パチパチっと目をしばたき、話しかけてきた。

「アナタ、百合が原中学校の生徒さんネ？」

その美しさに希色も目をパチパチとさせてしまう。

青い瞳に長いまつ毛、そしてプルンとしたピンクの唇。完璧だった。

この付近では外国人すら見かけないが、よくここに来るのだろうか。希色もいつもスーパーに来るわけではなかったたので、初めて見た顔だった。

「イ、イエス…？」

じっと彼女を見つめてしまい、慌てて答える希色。

あゝ、どうしよう、外人さんに話しかけられるなんて…いざ話しかけられると英語わかんなくなっちゃうよ。えっと…

「ソ、ソーリー、アイキャントスピークイングリッシュ…」

うわあ、私バカ丸出したよ…。通じてるのかなあ？もう英語これしか思い浮かばないよ。

「アア、大丈夫よ。ワタシ、ジャパニーズできるから」

希色が一人であたふたしていると、美女はそう言っただけでウィンクした。

「え？」

希色の視線が美女の目で固まる。

それを見ると、美女はウフツと笑い、

「百合が原中学校の生徒さんでシヨウ？ワタシ、マジヨンナと言います。よろしくネ！」

と、希色の手を握ってきた。

「え？あ、はい…。よ、よろしくお願いします」

と、返してみたものの、やはり彼女には見覚えがない。

希色がマジヨンナと名乗った彼女を見つめたまま、頭に？（ハテナ）マークを浮かべていると、彼女は「アア、ごめんネ」と手を離

した。

「ワタシ、明日から百合が原中学校のセンセイをすることになったのヨ」

「えっ、そうなんですか!？」

この人が…先生? やっぱ英語の先生なのかな?

そう思っていると、それに答えるようにマジヨナは言った。

「もちろん、イングリッシュを教えるのよ! 中学校の制服着てた力ラ、モシカシテと思って。アナタ何年生ですか？」

「あ、三年生です」

「三年生? レアリー! ? ワタシ三年生担当するのよ。そのうち授業で会えるかもネッ!」

そう言って、マジヨナは希色に抱きついた。

これには希色もビックリしたが、抱き付かれた瞬間にふんわりと香ったラズベリーの香りに、その気持ちはドキドキに変わった。

マジヨナは抱きついた格好から離れると、そのまま希色の両手を握って聞いてきた。

「アナタのネームはなんて言うの？」

「希色…立花希色です」

「Oh! キイロ? イエローね? ベリーベリーキュート! !」

「え、あはは、サ、サンキュー!」

この先生、面白いなあ。綺麗だし…すごいステキ。慌てて手を握り返し、突いて出た英語で返しながら思う。

するとマジヨナは、今度は希色の持つているかごを見て、

「ホワッツイズデイス？」

と英語で言ってきた。

「あ、これですか? えっと…チヂミは英語で何ていうんだろ? あの、チヂミってわかります? チ・ヂ・ミ」

かごを持ち上げて必死に説明する希色。

しかしマジヨナはよくわかっていない様子。

「フーン? 何デスカ?」

「韓国風…コリアのお好み焼きです。ピリツとしてておいしいんですよ！」

マジヨンナはなおも眉をひそめる。

「コリア？お好み焼き？？ソーリー、アイドントノー」

「そうですね…。今度、文化際で作るんですよ。マジヨンナ先生も食べてくださいね！」

文化祭という言葉にピンときたのか、マジヨンナは手を叩いて声をあげた。

「Oh！フェスティバル！？それは楽しみですネ！とても食べてみたいデス！」

と、そこまで言うと、マジヨンナは急に思い出したように時計を見ると、「ソーリー！」と謝りだした。

「キイロ、ゴメンね！ちよつと予定を思い出した！また学校で会いましょ！シーユー！ありがとネ！」

早口でそこまでまくし立てると、「バーイ」と手を振った後、赤毛をなびかせてマジヨンナは走り去っていった。

「バーイ…」

希色は手を振りながら、マジヨンナが去っていった後の出口をしばらく見つめていた。

綺麗な先生だったなあ。明日からあの先生が来るんだ！なんかすごい楽しみ。でも、どうしてこの時期なのかなあ…しかも三年生担当だし…。

と、そこまで考えていると、自分も巧達を待たせていることを思い出した。

「そうだった、早く巧くん家に行って、チヂミ作って元気付けてあげなきゃー！」

それに、マジヨンナ先生のことを話してあげれば、巧くんも喜ぶかもしれない。そう思うと少し嬉しくなって、ニラを手にとると、希色は急いでレジに向かった。

第十話

(5)

* * *

見間違いではなかった。

なぜなら鏡の中の自分が話しかけてきたからだ。

「やあ。気づいてくれた？まったく、ボクはこっちの方にいる暇なんてないんだけど…友達なんか連れてきちゃってさ」

「ミ、ミツク…？」

もちろん、朝とは違って予想はできていたため、悲鳴すら上げなかったものの、やはり突然鏡の中の自分が動くビックツとする。

「なんで…鏡の中に？どうやって…？」

巧が必死に鏡の中を覗き込んでいると、ミクタはなんと、鏡の中から手を出してきて、巧の肩をつかんだ。

その途端に巧は思わず「ひいっ！」と声を漏らしてしまった。

「こういうことだよ」

ミクタはそう言っていると、巧みの腕を鏡の中から引つ張った。

「あつ…！」

巧が再び声を出したが、引つ張られた腕は鏡にはぶつからずに、鏡を通り越して、向こう側のミクタにつかまっていた。

鏡の向こうにある自分の腕を見て、巧は目をパチクリさせる。

「わかった？」

ミクタの声に巧は反射的に腕を引き戻した。

「え…あ…どういう、こと？」

引き戻した自分の手を見つめながら問う。

その様子を見て、ミクタはにやけながら答えた。

「そっちとこっちの世界を往来できるわけ。鏡を通してね。一応、友達にはバレちゃやばいだろうから？こうやってキミのために避難してあげたわけ」

「そ、そんな…どうしてそんなことができるんだよ？」

巧が泣きそうな顔でミクタを問いたです。

なんなんだ、今の感覚は。鏡の中に手がニユツと入っていった…
うう、思い出すだけでゾクツとする。

するとミクタは、さも面倒だな、といった感じで頭を掻くと、両手を肩の高さにあげて、「さあわかりません」といったポーズをした。そして、

「ボクにもサツパリだね。恐らくあの手鏡が原因だろうけど。それを知るためにも、マジヨンナを早く見つけないとね。まあ何にせよ、今はこれでややこしい状況は回避できるんだからいいんじゃない？」と、一気に説明した。

「それはそうだけど…」

言い返そうとしたとき、巧はふと疑問に思った。

鏡を見てもミツクしか見られないということは…。

「あの、さ。俺が鏡覗いたときって、どうなるわけ？普通に見れないじゃん！それに、もしかして…ミツクがこっちにいたら何も見えないってこと…？」

よく考えたら、今日一日、朝の一見以来鏡という鏡をまったく見ていなかった。もう鏡を見ても、同じ動きをする自分を見ることができないのだろうか。

ミクタは顎をさすりながらしばらく考え、

「たぶん…ダメなんじゃない？なんなら試してみる？」

と言つて鏡の中から出てこようとした。

「え？いい、いいよ、出てこなくても！」

そう言つてミクタを押し返した（真似をした）ものの、普通に鏡を見ることをできないと考えると、かなり虚しくなってきた。

たぶんって…どう考えても今の状況じゃそれは無理に決まってる。

「そんな悲しそうな顔しなくても。どっちにしたってボクが鏡のようなもんなんだから、いつでも同じ動きはしてあげられるんだし。」

別にそれでいいんじゃない？」

そうケロッと言つてのけるミクタを見て、巧はさらに落胆した。
全然よくないんですけど…。

ほんとうにこの目の前にいる奴は自分なのだろうか。どう考えても別人格である。大体鏡の中の相手にいちいち口答えされるなんて、たまつたもんじゃない。

「それにね」

巧の考えをよそに、ミクタは説明を続けた。

「鏡を通して世界を行き来できるのはいいんだけど。どうやらそれが可能なのは、キミとボクがこうやって鏡の前にいる時に限るみたいだね」

その説明に、先ほどの考えもどこかへ飛び、巧は疑問符を頭に浮かべながら、ミクタに目で話の続きを促した。

「つまり、キミがいないとボクはそっちにいけないわけ。さつきそっちにここから戻ろうとしたけど、ダメだったし」

なるほど。巧はミクタの説明を頭で整理してみる。

え？でもちよつと待てよ。

「じゃあ、ミックは最初どうやってそっちにいったんだよ？」

巧が聞くと、ミクタは「ああ、それなんだけど」と言つて、首をかしげた。

「なぜか最初は入れたんだよね、こっちに。キミとボクが両方同じ世界にいれば、別にさつき言つたような条件は必要ないのかもしれない」

……。

両方同じ世界？条件？考えているうちに頭の中がぐちゃぐちゃになつてくる。

「ふーん…俺、実際もうよくわなくなつちやつたんだけど。まあいいや、また説明してよ。とりあえずはしばらくそっちにいるんですよ？」

巧がそう言つて蓋の閉められた便器の上に座ると、ミクタはため

息をついた。

「なにそれ。せっかく丁寧に説明してやってるのに。それに、ボクはこっちにいたくなくなつて、誰かさんのせいでそうせざるを得ないんじゃないか」

なんで俺が悪者に…そもそも俺は被害者なのに。ミクタの言葉に、巧の方も理不尽に思う。

「でもさ、よくそっちに行けるってことがわかつたね。最初から知つてたみたいじゃん」

「別に？ここで用を足してたら、キミが急に帰ってきたからね。どうしようかと思つてるときに鏡に触れたら…後は見ての通り」

「そっか…」

そこまで聞いて、巧は何か物足りないことに気づいた。

「あれ？あの…ネズミの…ニージョだっけ？そっちにはいないの？」

「ニージョ？さあ…さすがにトイレまでは一緒に来ないし、ボクは咄嗟にこっちに來たしね。どこにいるのかはわからないけど」

「えっ、なんだよそれ！無責任な。亮介に見つかったらやばいじゃん！早く探さないと！！」

急いでトイレを出ようとする巧をミクタが「ちょっと」と止めた。

「そんなに慌てて探しに行ったら、かえって怪しまれるんじゃない？はい、深呼吸して。リラックス、リラックス」

「ああ、そうだね。…スー、ハア…。…って、何か面白がつてない？」

焦る巧の顔を見てミクタはニヤニヤしていた。

「ハハ、まあね。だって、ボクはここから動けないし？今頃友達に見つかつてたりしてね。フフフ」

「フフフって…他人事みたいに。あ、でも、もし万が一見つかつたとしても、喋つてさえないなければ大丈夫なんだけど…。くそ、早く見つけて何とかしないと！」

「頑張つてね」

巧がミクタを睨みつつトイレを後にすると、ミクタは笑顔のまま

鏡の中で手を振っていた。

「なんだよ、タク。トイレ長かったじゃん。ウンコ？」

巧がりビングに戻ってくるなり下品なことを言う亮介。ニージヨを見つけた様子はなく、テーブルに開いた教科書を読んでいた。

「ああ、うん。ちよつと腹が痛くなつて」

などと嘘で返しながら、巧は目をキョロキョロとさせてニージヨの姿を探す。

亮介はその巧の視線に気づき、

「なんか探してんの？」

と聞きながら視線を追う。

「え？あ、いや、別に」

怪しまれるといけなかったので、目をキョロキョロさせるのをやめ、亮介の向かいの椅子に座りながら考える。

…見たらない。どこにいるんだ？

でもこの様子だと、俺達が帰ってきたのを察知して、どこかに隠れてるのかもしれない。あんまり探してると逆に怪しいし…。

ああ頼む！このまま大人しくしてくれ…！！

そうやってあれこれ考えていると。

ピンポーン。

ビクッ！

焦っている時だったので、巧は突然家に響いたチャイムに、過剰に体が反応してしまった。

その巧の姿を見て亮介が笑った。

「見たぜ見たぜー、何ビビッてんの？立花さんが来たんじゃない？」

「わ、わかつてるよ」

本当にビビッたわけではなかったのに、指摘されると顔が少し赤くなってしまう。

恥ずかしいのでササッと席を立ち、巧は玄関へ早足で向かった。ドアの真ん中の小さな穴から外の様子を見ると、門の前には希色

らしき人物が立っていた。

ガチャ。

「巧くん、お待たせっ！チヂミの材料買ってきたよ」

ドアを開けると、希色が満面の笑みでスーパールの袋を持ち上げて見せてくれた。

第十一話 厄日、厄日、厄日…（1）

厄日、厄日、厄日…

1

「勉強、はかどってる？」

希色がスーパールの袋から、材料を取り出しながら言った。

「あー…今からってとこかな」

と巧が答えると、亮介は

「それがさー、タクがずつとトイレできばっててさ。俺はもうバリバリ勉強してただけだよ」

と言つて、巧を嫌なものを見るような目で睨んだ。

「ば、ばっ！違うつて！」

希色がいる手前、巧は慌てて言葉を返したが、亮介はますます睨みをきかせた。

「はあ？さつき腹痛いつて言ってたじゃんけ」

「あ…うん、いや、そうだけど。じゃなくて、いちいちそんなこと言わなくてもいいじゃんか！」

ちらつと希色の方に目をやると、心配そうな表情でこちらを見ている。

「巧くん…？ほんとに大丈夫？体調も悪いの？」

「え？いや…大丈夫だって。ちょっと腹が痛くなっただけだよ」

巧が答えている様子を見て、亮介が「そういえばさー」と希色に向かつて言った。

「さつきも変だったんだよ、こいつ。ここに帰ってきたときに玄関で立ち止まってさ、家に入るとやばいとか言い出して。と、思ったらずぐに入ろうとか言ってさ。あれって何だっただよ？」

急に話を振られた巧は、

「ん？…ああ、あのこと？…気にしないでいいよ。部屋が散らかってたような気がしたただけだって」

と返したが、亮介は

「そうかー？そんな感じじゃなかったような気がするけどなあ？やっぱ…アレ？」

と先ほどのような目で睨むと、「エロ本？」と口パクで聞いた。「は？」

巧が分かっていない顔を見ると、亮介はもう一度「エロ本？？」と口パクをした。

亮介の言っている事を理解した巧は、はあく、とため息をつき、首を横に振った。

「え？何？どうしたの？」

希色は全くもって話が飲み込めていない様子。巧と亮介の顔を交互に見て、目をパチパチさせている。

「いやいや別に大したことじゃないよ。さっきも言っただけど、部屋が散らかってるしなあって思ったただだよ」

「ふーん。そっか…」

やっぱり今日の巧くん、なんかヘンだな…。

希色は困った顔をして返答する巧を見て、不安を募らせた。

あ、そうだ。あの話をしなきゃ。

「ねえ聞いて！さっきスーパーですごい人と会っちゃったんだ！」

希色が言くと、亮介は「え、なにになに？？」と早速話に食いついてきた。しかし、巧の方は何やらキョロキョロして落ち着かない様子。

巧くん、ほんとにどうしたんだろ…。

そう思っていると、亮介が、

「誰？誰と会ったん？」

と続きを促した。

「あ、うん。明日から来るっていう英語の先生なんだけどね。この国の人かな…すっごく綺麗な人だったんだよ！スタイル抜群で。」

私でもドキドキしちゃった」

「マジ！？外人さんかぁ…いいねいいね！！名前は何ていうの？」
亮介が身を乗り出して反応する。

「えっと、マジヨンナ…先生だったかな。あ、そうそう。しかもね、三年生の担当なんだって！！」

「え、今、何て！？」

希色の答えに、それまで集中して話を聞いていなかった巧が過剰に反応した。

「え？…英語の先生の担当が、三年生なんだけど…」

「じゃなくて！その先生の名前！」

「マジヨンナ…先生だよ？」

「…！！」

マ、マジヨンナって…まさか…。

「どうしたの？巧くん？」

希色が心配そうな顔をしながら、巧の元へ寄ってきた。

巧はそれに気付いて首を振る。

「あ…ごめん、なんでもないよ。知ってる人の名前に聞こえただけだから」

知っている…というわけではないが、嘘は言っていない。

しかし、これは偶然なのだろうか？ミクタ達が現れた直後に耳にしたマジヨンナという名前。頭の中で危険信号がチカチカしている。それに何だか嫌な汗も出てきた。

巧が一人で考えをめぐらせていると希色がさらに近くに寄ってきた。

「ねえ…巧くん。何か、私たちに隠してるでしょ？」

希色はそう言って、じっと巧の目を見て視線をはずさない。

「あ！」

しかし、それに答えたのは巧ではなく亮介だった。

「思い出した！さっき、タクが家に入れようとしなかったときさ、『もう一人の自分が』とかなんとかって、言ってなかったっけ？」

亮介が巧の反応を窺うが、巧は考えた顔をしたまま動かない。

「巧くん！…どういうこと？やっぱり、私たちには話せないことなの？何か、力になれないかな…？」

希色の視線から目をそらしていた巧だったが、ちらつと希色の目をのぞき見ると、再び視線をそらせなくなってしまった。

「ご、ごめん…。気持ちはずいありがたいんだけど、話しても、たぶん信じてもらえないと思うんだよ…」

巧のその言葉に、亮介が立ち上がった。

「おいおいそりゃないよ。大丈夫だって。俺、信じるよ」

「さつき信じてなかったじゃんか…」

亮介は巧の即座の切り返しに、若干たじろいだ。

「い、いやぁ…ごめん。あの時は、さ。てっきりアレだと思ったもんだから、ほら…アレ」

それを聞いてクスツと笑う巧。

亮介の言う「アレ」とは、恐らくエロ本のことだろう。好きだなあ。

「今度は信じるよ。タクの様子もマジみたいだしさ。親友じゃん？俺達」

亮介は友情だとか、絆だとか、なぜかそういう話にはいつも熱くなる。

いつもは調子の良いことばかり言っているが、亮介なりに何か信念というものがあるのだろうか。まあ、何だかんだいって、いざという時は仲間のことを気遣ってくれるいい奴だ。

「そうだよ！私だって、できるだけ巧くんの力になってあげたいし、ね？」

希色も口を揃えて言う。

巧は二人の熱い眼差しを感じ、こういう時に二人で組まれたら最強だな、と思った。どうやらこのまま黙っていても無駄のようだ。

「ありがとぅ…じゃあ、二人を信じて話すよ。真面目に、聞いてよ？」

巧が言うと、二人ともコックリと頷いた。

「…亮介にはさっき言ったけどさ、ものすごく簡単に言うと、今朝もう一人の俺が現れたんだ」

「もう一人の…巧くん??」

希色が聞き間違いを確かめるかのように巧に問う。

「うん。うちの母さんがテレシヨップ好きなのは知ってるよね? 今日その商品が届いたんだけど。その中であつたダンボールの中から、もう一人の俺が…出てきたんだよ」

「そ、そんな…本当に、そんなことが…?」

希色は目を大きく見開いて、固まってしまった。

「タク…ごめん、信じてないわけじゃないんだけどさ…なんか、こう、現実離れしすぎてて、いまいち想像つかないっていうか…」

亮介もこめかみの辺りを掻きながら、巧の言っていることを受け入れようと葛藤しているようだ。

「いや、信じてもらえなくても無理はないよ。俺だって実物を見た後の今でも、何だか信じられないし…」

そう言つてうつむく巧を氣遣うように、希色が声をかける。

「そっか…それで今日遅刻したんだね。ごめんね、何も知らずに色んなこと言っちゃって」

「いや、そんな謝らなくていいよ。むしろ氣遣ってくれてうれしいし」

「うん…」

巧の返答に頷くと、希色は椅子に座り、黙りこんでしまった。

「鏡の中から出てきたってことはさ…じゃあ、姿形も全く一緒ってこと?」

沈黙を避けるかのように、今度は亮介が口を開いた。

「うん、まあ…。性格は、違うみたいだけど」

「え、じゃあ、自分と話したってことか!？」

巧の答えに驚き、さらに問う亮太。

しばらく黙っていた後、巧は口を開きかけたが、その前に希色が

それを制した。

「浅葱くん…あんまり質問責めしないであげよう？巧くんもまだ、今日そういう目にあつたばかりなんだし…」

「あ…ごめん、つい…」

亮介が謝つたのを見て、希色は頭を横に振り、再び黙ってしまった。希色も亮介に悪気がないことはわかつている。

亮介も黙ってしまったが、何だかどうしてよいかわからないといった感じで落ち着きがない。

巧は二人の様子を見て、困ってしまった。

二人が自分のことを気遣ってくれているのは、痛いほど感じる。しかしこのように二人も同じように困らせてしまつては、やっぱり言うべきでなかったのでは、と思つてしまう。

でも、どうやって説明すれば…いきなり実物を見せるわけにもいかないだろうし…。それに、ミツクを二人に対面させたところで、どうしてもらうとか、全く考えが浮かばない。

「はい、こいつがもう一人の俺で、ミツクです」なんて、紹介するのなあ…。

三人がそれぞれに黙り込んで沈黙が続いていると。
カタカタカタ。

どこからか、指で机を叩くような音がした。

「！？」

「…！！」

「なんだ！？」

沈黙の最中だったので、過剰に反応してしまう三人。

「キッチンの方から聞こえてきたけど…」

希色が口を押さえながらキッチンの方を見つめている。

「まさか…！？」

巧は二ージヨの存在を思い出して、すぐさまキッチンへ向かった。

第十二話

(2)

2

ニージヨ…どこにいるんだ…！？

蛇口付近や食器洗い機あたりを覗いてみるが、ニージヨの姿は見当たらない。

「巧くん、何かいるの？もしかして…ゴキブリとか？」

希色は音のしたと思われるキッチンの近くにはいないにもかかわらず、キッチンからさらに離れたところに身をおいている。

「ゴキちゃんぐらいいいじゃん？わざわざ探さなくてもさ。そのうち出てくるって」

そう言いながら、亮介もキッチンへと向かってきた。

「タク、ゴキシヨットとかないの？あれを用意しとけば、出てきた時に一発でいけるって」

ゴキシヨットというのは、ゴキブリ用の殺虫剤である。スプレー

タイプで、一秒吹きかけるだけで退治できるという優れたものだ。

「うゝん…いないなあ…」

巧は食器棚の裏、冷蔵庫の下…それぞれ見てみるが、ニージヨはいないし、音一つしない。

「巧くゝん、もういいよゝそんなの探さなくても。」

希色はすでにリビングから姿を消している。

「ここにゴキシヨットとか置いてないん？」

亮介が鍋の置いてある棚の扉を開けようとしたその時。

「きゃあああああああああああ！！」

希色の悲鳴が家中に響いた。

「希色ちゃん！？」

巧と亮介が声のする和室へ駆け寄ると、希色は畳を指差しながらあたふたしていた。その先には畳以外何も見当たらない。

「どうした？ゴキ！？」

亮介が聞くと、希色は首を激しく横に振った。

「違う…ゴキブリなんかじゃなくて、もっと何か大きい生き物がここをダダダって走り去って行っただの…！」

大きい生き物…？

ニージヨだ。そうに違いない。

希色たちに見つかるまいと必死に逃げているのだろうか？

やっぱり見つからない方がいいのかな？喋るネズミだなんて知られたら、もっと話がややこしくなってしまうし…。

いや、もうミツクのことは二人に話してしまったのだから、この際二人にニージヨのことも言ってしまったえば、わざわざ逃げる必要もなくなるだろうけど…。

「うわっ！」

巧が思考していると、今度は亮介が声を上げた。

「タク、今なんかでつかいのが風呂場のほうに向かったぞ！」

「え、風呂場に…？うん、わかった、行こう！」

と巧が駆け出そうとすると、亮介が

「おい、タク！その前にゴキシヨットは？あれ持ってたほうがいって！」

と止めたが、

「ゴキシヨット！？…ああ、いらないよ。てか持ってたちゃダメだ！」

と巧はそのまま風呂場へ駆けていった。

「え、何でだよ？ちつとは効くかもしれないのに」

言いながら亮介も巧の後を追う。

風呂場に来ると、中の窓からニージヨが必死に外に出ようとしていた。マントを羽織っているのですぐにわかる。

しかし幅が狭いのでかなり無理矢理抜け出そうとしているようだ。

「ニージヨ…！」

巧がニージヨの名を呼ぶと、彼はチラッとこちらを見たが、言葉は何も発せず、なおも外へ抜け出そうとする。彼の体はちょうど柵の間に挟まったような状態だ。

「ニージヨ！別に逃げる必要ないよ！友達にはちゃんと話したからさー！」

巧がそう言つて柵に挟まっているニージヨをつかもうとしたその時に、ニージヨはスポンと柵の向こう側に抜け、そのまま庭を走り去ってしまった。

「ああ…どうしよう…いやまだ間に合うかも！」

巧がそう思つてすぐさま後ろに振り返つて走り出そうとしたので、後ろにいた亮介に思い切りぶつかってしまった。

「痛…やってくれるな。あれは…ネズミ？とにかくもう逃げたんやろ？そんな追つかけんでも…」

亮介がグチをこぼしたが、巧は「ごめん！」とだけ言つてそのままダッシュで脱衣所を出た。

「巧くん!？」

希色は風呂場の外で様子を窺っていたのだろうか、入り口のすぐ傍にいて、出てきた巧に声をかけた。

「ごめんっ!!」

しかし巧はそれにも答えず、玄関までダッシュし、そのまま外に出て行つてしまった。

「…タク、どうしたんだ？」

脱衣所から出てきた亮介は首をかしげながら希色に聞いたが、彼女も首を振った。

巧は外に出て、風呂場の窓がある裏の方へまわった。

「やっぱり…いない、か」

巧の家の周りは紅葉という植物で囲われている。それと窓との間の通路は狭く、そこにいればすぐに姿を発見できるだろうが、何せ

相手はネズミだ。この植物の間だつてスルスルと抜けて、隣の家のほうに逃げていけるだろうし、すぐに見つけられる範囲にニージョがまだいることは考えにくい。

窓の向かいにある紅要の下のほうから、向かいの家の庭を覗いてみるが、やはりニージョの姿は見当たらなかった。

でも、なんで逃げていったんだろう…。

俺の話聞いてなかったのかな？ いやでもそれにしたって、あの口うるさいニージョのことだから、何かこちらに言い返してきそうなものだが。何か様子がおかしいように思えた。

あきらめて玄関へ戻ると、希色たちが外に出てきていた。

「巧くん…」

希色が心配そうに声をかけてくる。

その表情を見ながら、巧は彼女にそのような思いを何度もさせてしまっていることを申し訳なく思った。

「いなかったよ…」

巧が言うと、亮介が攻め寄ってきた。

「いなかったって…何でそんなに必死に探してんだよ？ 何か、さっきの話と関係あるわけ？」

亮介の顔を見ると、まだまだ聞きたいことがたくさんあるといった感じがした。そりゃそうだろう。これまで落ち着かない行動を見せすぎている。

これは話さないと、こいつは逆に怒るな、と巧は思った。

「うん…実は、さっきのネズミも、もう一人の俺と一緒に現れたんだ」

「えっ？」

希色がどういうことかわからないといった顔をしたので、

「ああ…さっきのはネズミだったんだ。ただのネズミじゃないけど…」

と補足をした。

「俺もよくわからないんだけど、あのネズミ…ニージョっていうん

「ただ、喋るんだよ、日本語を。しかも関西弁」

それには二人とも驚きの表情を見せた。

「喋る！？ホントか？さっきは何も言っていなかったみたいけど…？」

亮太の問いに巧は頷いた。

「うん…でも、さっきは何か様子がおかしいように見えたんだ。気のせいかもしれないけど」

「そのネズミさんは…もう一人の巧くんとは、どういう関係なの？」
今度は希色が問いかける。

「それは…よくわからないけど…とにかく二人とも、人を追っていたみたいなんだ」

と、巧はそこまで言って、頭の中であることをひらめいた。

「そうだ…ミックなら何かわかるかもしれない！」

一人で頷いている巧を見て、亮介は首をかしげた。

「ミック…？」

「ああ、もう一人の俺だよ！今からそいつに相談してみようと思うんだけど。なにかわかることがあるかもしれない」

巧がそう言って家の中に入ろうとするので、亮介はそれを慌てて止めた。

「もう一人のって…タク、もしかして家の中にそいつがいる、とか？」

それを聞いて、さすがに二人の気持ちを理解したのか、巧は頭を掻いた。

「ご、ごめん。実は、今家の中に隠れてるんだ。やっぱり、そんなもう一人の俺とか見たくない…よね？」

その巧の言葉に亮介は顔をしかめたが、希色は首を横に振った。

「ううん、ちょっと恐いけど…私は会ってみたい。巧くん、その人と会って大丈夫だったんだよね？」

予想外の希色の言葉に、巧はカクカクツと変な頷き方をした。

「だったら、私も勇気を出せば会えると思う。こんなわけのわから

ない状態で、巧くんが一人で困ってるのは見てたくないし、何か一緒にできるんだったら、私、力になってあげたいし……」

希色がそこまで言い切ってしまったので、亮介も感化されたのか、「じゃ、じゃあ俺も対面してみることにするよ、もう一人のタクに……あゝなんかめっちゃドキドキしてきた」

と希色の意志に賛同した。

「そっか……」

非常時ではあったが、心の中に何かが込み上げてきて、ふと涙を浮かべそうになった。二人の言葉に、これまでになかった心強さを感じ、巧のこれまで焦っていた心は、幾分か落ち着いていた。

「ありがとう。じゃあ、今から会うよ？もう一人の俺に。心の準備は、いい？」

巧がそう言って二人の表情を確かめると、二人ともその時には真剣な表情に移り変わっており、コックリと深く頷く姿が目映った。

「ミツクはトイレの鏡の中に隠れてるんだ」

巧が意を決した二人をトイレまで連れ立とうとしたが、

「そっちに行く必要はないよ」

と待ったがかかった。

「え？…亮介、今なんか言った？」

巧は後ろを振り返って聞いたが、亮介は首を横に振った。

「いや、何も言っていないけど…てか、今のタクの声だったような…？」

「うん、私も巧くんが言ったのかと思ったけど…」

と、希色も口を合わせて言う。

「え？ううん、俺は何も…。じゃあ…どこから…？」

巧がそう言いながら周りを見渡したその視線の先に、自分の姿が映った。

「そう、ここだよ」

玄関に置いてある等身大の鏡の中から、その声はした。

「え？え？あ…あれ、あれ…！？」

巧よりも先に反応したのは希色だった。

亮介も鏡の中を見て声を出せずにいる。

そんな二人の様子にも気付かず、巧は鏡の中のミクタに声をかける。

「あ…ミツク…？どうしてここに？」

「どうしてかって？ここで待ってたんだよ。君がいなくちゃそっちには行けないけど、こっちを移動することはいくらでもできるからね」

ミクタはそう言ってため息をつくと、巧に言った。

「そんなことより、どうやらネズミが逃げ出したみたいじゃん？」

「あ…うん。話しかけても反応がなかったんだ。追いかけたんだけど見失っちゃって。それで、どうしたらいいかわからなくて、今ミツクに相談しようと思ってたんだ。え、でも何でミツクがその事知ってるの…？」

巧とミクタ。まったく同じ姿の二人が鏡越しに会話をし、別の動きをしているのを間近で見た希色と亮介は、開いた口がふさがらなかった。

「しゃ…喋ってる…？」

「本当に…もう一人の巧くんなの…？」

巧は二人の反応に気づき、

「あ…ミツク、その、何ていうか、友達にはもうミツクのことを言っちゃったんだ…ごめん！」

と慌ててミクタに説明した。

するとミクタはフン、と笑って、

「わかってるよ。だからここまでボクが来たんじゃないか」

と希色や亮介の方を交互に見た。

「ねえ、巧くん。私、本当に信じられない。夢見てるんじゃない…よね？」

希色も巧とミクタを交互に見ては瞬きを何度もしている。

「う、うん。俺も夢と思ったけど…残念ながらそうじゃないみたいなんだ。…希色ちゃん、大丈夫？」

「…うん。何とか大丈夫みたい。でもやっぱり現実にはいないように感じちゃって」

「そっか…ここにるのが嫌だったら、リビングの方に行っても行っていいからね？」

巧が言つと、希色はコックリと頷いただけで、そこから動くことはなかった。

そして希色の様子を確認しつつ、その隣にいる亮介の様子を見ると、彼は鏡の中のミクタを見たままミクタから目が離せなくなつて

しまっているようだった。

「そんな…マジだったんだ…でもさ、タク。俺には鏡の向こうのタクの声が聞こえないんだけど…？」

「えっ？」

亮介に言われ、巧はミクタの方へ視線を移した。

「あのさ、ミック？ミックの声は俺にしか聞こえないの…？」

「みたいだね。ボクも君の友達の声は聞こえないよ。まあ、行き来できるとは言っても、やっぱり鏡は世界の境界線だから。だったらボクがそっちに行った方が都合がいいんじゃない？」

「ちょ…待つてよ！友達にも心の準備つてものが…」

ミクタがそう言つて突然こちらに出ようとしたので、巧は慌ててそれを止めた。が、しかしそれはマズかった。

「タク…今…で、手が…！」

亮介が鏡の方を指しながら震えている。

希色も口の所を手で押さえて目をギュツとつぶっている。

「え？」

巧が亮介の顔から鏡の方へ視線を移すと、鏡からニュツと出たミクタの手を、巧が掴んでいる状態だった。

「あ…」

慌ててミクタの手を離し、笑つてごまかそうとする巧。

しかし亮介は先ほど見たものを思い出しながら、声が出ないようだった。そして再びミクタの方を見ると、そのまま固まってしまった。

その亮介の視線を痛く感じたのか、ミクタは

「なんだよ、ボクは見せ物じゃないんだ。そんなにジロジロ見ないでほしいんだけど」

と亮介を睨みつけた。

一方睨まれた亮介は、突然睨まれてビクつとしてしまっていた。その亮介の様子を見て、巧は苦笑いをしてしまう。

亮介つて…意外と臆病？いやいや、それを言うなら自分なんて…

朝の自分のビビリ様を二人に見られたら、それこそ笑われてしまうだろう。あの、もう一人の自分が鏡から出てきた瞬間を思い返すだけで寒気を感じる。

…などと考えていたが、当初の目的を思い出し、「そのままそっちにいていいから…」と言った上で、巧はミクタに問いかけた。
「それで、何で二ージョのこと知ってるの？…そっちでも同じことが起こってるってこと？」

その問いに、ミクタは亮介や希色をチラチラ見ながら頷いた。

「まあ…そういうことになるね。トイレのドアをちょこつと開けて、君たちのやり取りを聞いてたけど」

「そっか…」

と返事をしたものの、巧はとても嫌な予感がした。

「でも、ちよつと待ってよ。そっちにはミツクがいるんだから、俺はその場にいないんじゃない？…そうだよ。それにそこに俺がいなかったら、それこそどうなっちゃってるんだよ！？そこでの出来事が成立しないんじゃない？！」

巧の慌てている様子を見て、ミクタはクスクスと笑った。

「それはね…企業秘密ってことで」

「企業秘密！？なんだよ、それ。大体企業じゃないし。全然説明がつかなくなっちゃうじゃないか！」

「まあまあ、落ち着いて。隣の友達が変な目で君を見てるよ」

ミクタになだめられ、巧は「え？」と我に返り、ゆっくりと亮介と希色の方に顔を向けた。

「巧くん…私、だんだん平気になってきたかも…。だって、ずっと見てたら、巧くんが一人で鏡に向かって話してるようにしか見えななんだもん」

希色は苦笑いのような困惑しているような表情を浮かべている。

「慣れって怖いよ。さっき手が出てきたときはビビったけどさ、なんか変な映像観てるみたいだ」

亮介も先ほどのビビリ様とはかけ離れた、好奇心の溢れた目で巧

に話しかけ、

「鏡の向こうのタクは何て言ってるん？」

と興味律々で聞いてきた。

「あ…えっと…」

巧はこの事態を見た上での二人の様子を見て驚くとともに、散々ビビッていた自分が恥ずかしくなった。

巧が一人で固まっていると、

「やっぱりさ、ボクがそっちに出て行ったほうが都合がいいと思うんだけど？さつきからジロジロ見られて気が散るし」

と、ミクタがイライラした口調で語りかけてきた。

巧はピクツと反応してミクタのほうへ向き直り、

「あ、ああ、うん。ちょっと待って。二人に聞いてみるよ」

と言うと、またゆっくりと希色たちの方へ顔を向けた。

「ミツクが…というか、もう一人の俺が、こっちに出てきたい、って言ってるんだけど…」

言いながら、巧も緊張度が増してきていた。

「こっちについて、鏡の中からこっちの方に出てくるってこと…？さつき…手が出てきたみたいにな？」

希色の表情に少しずつ不安の色が増していく。

「う…ん。こっちに出てくれば、希色ちゃんたちももう一人の俺の声が聞こえるみたいなんだ。でも…大丈夫？」

巧が答えに、希色の代わりに亮介が反応した。

「そんな、大丈夫なわけないって！タクがもう一人出てくるんだろ？うう…考えただけでも鳥肌立つ…」

「…だよ。じゃあ、やっぱこのまま…」

と巧がミクタに返事をしようとする、それを希色が制した。

「巧くん…大丈夫だよ。さつき巧くんに協力するって、もう一人の巧くんにも会って決めたんだもん。…出てきてもらって、いいよ。浅葱くんも…いいよね？」

希色にそう言われてしまっでは、亮介も男としての立場がない。

渋々頷いてみせた。

希色の言葉を聴いて、巧は感心してしまった。
女の子って強いなあ。それに対して亮介のあの顔。

希色の様子を見ると、不安の色はあるものの、その意思がしっかりとしていることが窺える。

巧としても、あまり自分が鏡から出てくる様子などまだ全然慣れてはいないし、そう何度も見たいものでもない。わずかに抱えている恐怖を、希色の言葉は和らげてくれるようだった。

「希色ちゃん……わかった。ミツク、二人とも了解してくれたよ。出てきてくれる？」

巧が鏡に向かって言うと、やっと話が終わったかと待ちくたびれていた様子で、ミクタは「はいはい」と頷いた。

「ちよつとそこ、どいて」

と巧に向かって言うと同時に、ミクタの手が、足が、顔が、順々に鏡の中からこちらの世界へと姿を現した。

「きゃっ!!」

希色も思わず声を上げる。

亮介も目を見開いて、そこに目が釘付けになっている。
鏡の中から出てくるとはいつても、それは一瞬のこと。

驚いている間に、希色と亮介の目に映っているものは、まったく同じ姿の二人が並んで立っている状態へと落ち着いていた。

「……」

「……」

あまりのことに言葉を失う二人。

「あの……希色ちゃん？亮介？大丈夫……？」

二人の様子を見て心配になる巧。

俺もミツクが現れた時、こんな顔してたんだろうか……？

巧の声に二人も我に返ったようだが、目をこすったり、パチパチさせたりしている。

「巧くん？こっちが巧くんだね……？あゝ、巧くんが二人いるよ！

ほんとにほんとなんだ…どうしよう!!」

希色はもうパニック状態である。

「希色ちゃん、落ち着いて!!俺が巧だよ。とりあえず…ちょっとあっちに行こうか?」

巧は希色の手を取りながら、亮介にも声をかける。

「亮介、大丈夫?」

「あ、ああ…」

頭を抱えているが、なんとか大丈夫のようだ。

巧はミクタが出てくるのを止めておくべきだったと後悔する。

やっぱり刺激が強すぎるんだよ…一旦ほかの場所に移って落ち着かせなきゃ…。

リビングへ二人を連れて行こうとしている巧に向かって、それまで様子を窺っていたミクタが口を開いた。

「まったく…迷惑だよ、この反応はさ」

その無神経な一言に巧はムツとして、

「当たり前だよ!こんなことありえるわけがないんだし。大体同じ顔してるくせに、もうちょっと気遣いとかできないのかよ!」

とミクタへ怒りをぶつけた。

「ご、ごめん。でもボクだって出てくる度にこう反応されちゃたまらないってことだよ。まあでもさ…確かにそうだね。君なんか気絶しちゃったんだしね」

などと言多いミクタの気持ちなど汲み取れるはずもなく、巧は返事もせずに二人をリビングに向かわせた。

ミクタを放っておき、リビングに向かう途中。

「タク…ほんとにタク…なんか？」

亮介が玄関の方を振り返りながら、巧に聞くとともに自分に確認するともなく言った。

その問いに巧は頷いたが、

「まあ亮介、とりあえずそこに座って一旦落ち着いた方がいいよ」と言つてリビングの椅子をひいてやった。

「うん…落ち着いてないっちゃ落ち着いてないけどさ。何ていうか、やっぱ信じらんなくて」

亮介は言われたとおり椅子に座ると、必要以上に巧の顔をじつと見ながらつぶやいた。

それとは対照的に、意識的に巧から目を逸らしていたのが希色だった。

「ごめんね、巧くん…。あまりのことで…私、なんか巧くんのことすぐに直視できない…」

「うん…」

希色の言葉に、巧も複雑な気分になる。謝ってもらふ必用など全くないのだが、この避けられていような感覚に陥ったようで、そのことを伝える言葉が出なかった。

「てかさ、タク。あつちの…その、もう一人のタクはあのまんまでいいん？」

亮介はしきりにミクタの存在を気にしているようだ。今は壁に隠れて見えないが、その向こうには同じ姿をした友人がいると思えば、気になるのも仕方がない。

言われて、巧も玄関のある方の壁へと視線を移した。

「俺もさ、あんまり対面したくないんだ、あいつと。自分と同じ姿をしてるくせに、イヤミだし、偉そうだし。なんか自分が嫌なやつ

に思えてきてさ」

そう言っただけ息をつく、さらに続けた。

「いきなり現れて、もうひとつの世界がどうだの、誰か探してるだの…おまけに喋るネズミまで出てきて？そいつは逃げ出すし。もうわけわかんないだよ！」

事の始まりから思い出していくと、自然と怒りがこみ上げてきた。どうして自分がこんな目に？

今置かれている現状と、これから待ち受ける自分の運命への不安や多くの疑問。様々な感情が頭の中で入り混じっているが、それが最終的に抑えきれなくなり、怒りとして姿を現すよう促す。

「タク…」

巧の不安定な様を見て、亮介も心を痛める。

信じられない光景を目の当たりにしたばかりで驚きは隠せないが、当事者の巧と比べれば自分なんてまだマシなものである。

そうは思うものの、自分自身の動揺もあってか、なんと声をかけていいものやら、言葉が見つからなかった。

「巧くん…本当にごめんね。私、巧くんの力になるって言うてたのに、逆に巧くんに気を使わせちゃってるよね…。巧くんだってどうしたらいいかわからないのに…」

希色はそう言い終えると、逸らしていた視線を巧へと向けた。

巧は急に視線を向けられて、感情的になっていたせいもあって恥ずかしくなり、顔を赤らめる。

「いや…そんな、謝らなくていいよ。俺こそ、ごめん。取り乱しちゃって…」

「ううん。一番苦しんでるのは巧くんなんだもん。私が巧くんに負担かけてちゃだめだよ。私はもう大丈夫だから」

希色はそう言ってニッコリ笑って見せたが、すぐに真面目な顔に戻り、続けた。

「でも…、もう一人の巧くん…ミツくん、だっけ？彼にもこっちに来た理由が何かあるのかもしれないし…ちゃんと話を聞いておく

べきだと思っただ。巧くんも嫌だろうけど顔を合わさないわけには
いかないだろうし……」

言いながら巧の顔を窺う希色。

彼は話を聞いているのかいないのか、視線を下に落とし、何か考
え事をしているようだった。

希色が巧の様子を見て言葉を詰まらせていると、今度は亮介がそ
れを引き継ぐように言った。

「タク、俺もそう思うよ。立花さんの言うとおりだ。正直アレには
ビビったけど、そのまんまじゃあいつと向き合えないし、タクにも
迷惑かかって協力どころじゃなくなるしさ。俺ももう決心ついたよ。
あいつ、ここに連れてこようや。今は一緒に話聞いてやるくらいし
か思いつかんけど、とりあえず、あいつの話聞こうや。何かできる
ことがあるかもしれんし」

亮介の熱弁に、巧は視線がそのままでありつつも、コクリと頷い
た。

亮介の言う「あいつ」とは、ミクタのことだろう。あの言いよう
ではあまりミクタにいい印象は持っていないようだ。まあ、あれで
いい印象を持てと言う方が無理な話だが。

巧は二人の話を耳に入れながら、自分もしっかりせねばという思
いと共に、先ほど吐き出した本音によって引つ込みがつかなくなっ
てしまったような感覚もあり、葛藤していた。

このまま二人に一緒に話を聞いてもらったとて、もう一人の自分が
現れたという事実が変わるわけではないし、彼がいなくなってくれ
るわけでもない。この事実を受け入れるしかないことはわかってい
ながらも、そこから逃げ出したい自分がいる。しかし、その気持ち
を悟って何とかしてくれようとしている友人たちの想いを感じると、
やはり向き合わなければならぬと思ひ直すのだった。

そして落としていた視線を二人に向ける。

「希色ちゃん……亮介……。ごめん。いや、ありがとう。その気持ちだ
けで十分だよ。文句ばっか言ってたって状況は変わるわけじゃない

しね。希色ちゃんが言っただように、まだ俺が知らないことがいっぱいあるのかもしれない。気をしっかり持たなくちゃ」

「巧くん……！」

巧の発言に、希色の表情がパツと明るくなった。

亮介はウン、ウン、と深く頷いて、

「じゃ、呼んで来ようか、あいつを」

と椅子から立ち上がった。

が、その本人が自らリビングへとやってきた。

第十五話

(5)

「あいつって…そんな呼び方は感心しないなあ」

「えっ？」

巧と希色も立ち上がり、皆の視線が開かれた扉の前に立つミクタへと集中する。

「ボクにはミクタっていう名前がちゃんとあるんだ。まったくいっつもこいつも…」

「な…！」

亮介は言い返そうとしたが、やはり巧と同じ姿のミクタを目にすると、若干たじろいでしまう。

フーっと一呼吸置いて再び口を開く。

「ちょうどよかったよ。呼びに行こうと思ってたんだ。てかミクタって…プププ」

巧を逆から読んだ名前に笑いをこらえる亮介。

「亮介…！ダメだって…！」

巧は慌てて亮介の笑いを止めにかかりつつミクタの顔色を窺ったが、本人はさして反応していなかった。

自分の呼び名は気にするくせに俺のことは「君」としか呼ばないし…。自分が言い返したくなっただが、その後が面倒になりそうだったので口をつぐんだ。

「君たちの話もひと段落ついたみたいだし？早速ネズミを追いかけてようか」

脈絡もなくミクタはそう言った。

突然の提案に眉をひそめる巧。

「ニージョを追いかける？…簡単に言うけど、どこに行ったのか全然見当ついてないよ？」

「見当は大体ついてるよ。恐らくニージョはマジョンナのところだね」

「マジヨンナ!?」

ミクタの言葉に全員が反応する。

「巧くん…マジヨンナって…」

希色の問いに巧は頷く。

「うん…ミツク達が追っている人っていうのが、マジヨンナって人なんだ。だからさっきはビックリして。まあ、名前が同じだけなのかもしれないけど…」

「あの先生が…」

希色は先ほど出会ったばかりの赤毛の美女を思い出していた。

「希色ちゃん、そのマジヨンナっていう先生、どんな感じの人だった?もしかしたらミツクの言っている人と同じ人かもしれない」

「あ…うん。髪は赤みがかって長いストレートだった。スタイルも抜群で美人だったし…何より外国の人だったから、目立つと思う」

「そっか、言ってたね、外人さんだって。…ミツク、同じ人っぽい?」

巧はチラッとミクタの方を見て答えを待つ。

「うん。間違いないね。マジヨンナは元々外国の…いや、そんなことは置いといて。学校の先生って言ってたよね?なら、君たちの学校にいるかもしれない」

巧はミクタがマジヨンナについて、学校の先生であることを知っていたのが気になり、問おうとしたが、思い直した。そういえば、トイレから会話を聞いてたって言ってたっけ。

そう思っていると希色がミツクに対して口を開いた。

「でも…今日はもう学校終わっちゃってるし、あの先生は明日から学校に来るって言ってたから、学校に行ってもいないと思う…」

希色の情報にミクタは腕を組みつつ息を吐く。

「…なるほどね。まあ、いなかったにしても、住所なり何かしらの情報は得られるんじゃない?今は他に行く場所がないしね」

「いやいや、そんなことできないって!まだ来てもない先生の住所聞きだすとか不自然すぎるし」

亮介が突っ込みを入れる。

「まあ…そうも考えられるけど。マジヨンナがあそこの先生としてやっていこうとしていること自体、あそこには何かあると思うんだけどね」

ミクタはそう言つと、椅子を引いて座つた。彼の後に続き、皆も座る。

落ち着いたところで巧が口を開いた。

「でもさ、今日じゃないとダメなの？どっちにしても明日になれば先生は学校に自分から来てくれるわけだし…」

「そうじゃん！タク、ナイス提案！もう暗くなってるしさ、学校に行つても先生帰つとるかもしれんし」

亮介がそう言つたのを聞いて皆が時計に目を移すと、時刻はもう七時半をまわるところだった。

「うーん…あんまり時間を置かない方がいいとボクは思うんだけどね。ニージヨの様子がおかしかったのが気になるし。恐らくマジヨンナが奴を呼びつけたはずなんだよ。何かたくらんでるような気がする」

ミツクは焦りの表情を見せている。いつもの余裕で生意気な態度とは違い、初めて見せる表情だった。

巧はそれを見て、希色の言つたように、彼にも何か理由があるのかもしれない、と思つた。

「じゃあ、今から…」

巧が学校に行こうと言おうとしたが、それに否定的だったミクタが彼を制した。

「いや、いいよ。確かに今日学校に行つてもマジヨンナに会える可能性が低いし。明日学校で様子を見よう」

「あ…うん。ミツクがそう言うならそれでいいけど、ほんとにいいの？結構ヤバめなんじゃ…」

「大丈夫だよ、きつと。まだマジヨンナもこっちに来て間もないはずだし、何かやらかすにしてももう少し後だと思つ」

ミクタの発言に、亮介が再び突っ込みを入れる。

「あのさ…そんなにそのマジヨンナって先生はやバい存在なん？立花さんの話からしちゃ、そんなに危険人物な感じはしなかったけどさ」

ミクタはそれに対して首を振った。

「いや、危険人物とかそういうんじゃないけどね。正直ボクも、あの人がこっちに來た理由とか、色々聞きたいことはたくさんあるんだ」

「ふん…」

そして、なんとなく沈黙の時が訪れた。

少しした後、思い立ったように希色が口を開いた。

「ねえ…ミツク、くん？あなたがこっちに來た理由とか、そういうのは教えてくれないのかな？私たち、巧くんにか協力したいと思って、一緒に話を聞く決心をしたんだけどね。巧くん、いきなりこんなことになって…すごく不安定になって」

巧は自分のそんな話をされたので、顔が熱くなるのを感じた。

希色はミツクをじっと見て続ける。

「ミツクくんも理由があつてこうやって現れたんだろうし、巧くんには負担かかるだろうけど、私は二人がもっと話し合えば、そこでも協力していけると思うの。ミツクくん、ずっと鏡の中から出てこないように言うわけにもいかないし…」

希色はそこまで言うのと、苦笑いをした。

「ごめんなさい。なんか、私が口出すようなことじゃないんだろうけど…」

「…」

「…」

希色の話に、二人とも黙りこんでしまった。

巧も自分に代わって希色が言ってくれたことに対して、感謝の気持ちと自分で言い出せなかった恥ずかしさが混在していたが、なんと言葉にしているのかわからなかった。

巧とミクタがモジモジしていると。

グゥ。

静かな空間に下品な音が響き渡った。

「ご、ごめん…俺だ」

亮介が腹の辺りをさすりながら笑った。

「も、浅木くん…せっかく真面目な話してたのにー」

希色が横目で亮介を睨む。

「はは、ごめんごめん…ずっと何も食ってなかったからさ」

「…しょうがないなあ。じゃあ、今から私、チヂミ作るから。話の続きは食べながらしよっ！」

希色がそういつてキッチンへ発つを見て、巧とミクタは大きくため息をついた。

同じしぐさをしたのに気づいて、お互いに顔を向ける二人。その先が同じ顔だったからか、二人はなんとなくおかしくなって、プツと吹き出した。

すると、希色がキッチンから戻ってきて言った。

「もう、何してるの？みんなも手伝うんだからね？」

その一言に今度は男三人、目を合わせて

「はい」

と返事をするのだった。

「お、イけるじゃん！うまいよ、これ」

亮介が口の中に物を入れたまま大きく口を開けて言った。

テーブルの上には皆で力を合わせて（ミクタを除いて）作ったチヂミが多く盛られた皿が置かれている。それをそれぞれ小皿に分けて食す。

「ホント！？巧くんは？どう？おいしい？」

希色は亮介の反応に目を輝かせ、巧の様子を窺う。

巧はその問いにはすぐには答えずに、しばらく口を動かし、食べ物飲み込んでから口を開いた。

「…うまい！おいしいよ、希色ちゃん。チヂミを提案して正解だったね」

「でしょでしょ！？安い材料でおいしいし、結構ボリュームもあるんだよね」

二人の好評価を受けてさらに笑顔になり、自身もチヂミを口へと運ぶ希色。

ニラや人参、玉葱といった野菜が豊富に混ぜ込まれたこのチヂミ、薄く焼き上げられたパリッとした食感と、韓国風と呼ばれる元でもあるキムチのピリッとした味、仕上げにつけるゴマだれが合わさると、絶妙な美味しさが作り上げられるのだ。

と言っても、どんな料理であっても万人に愛されることはないことは世の常である。

「…。何だよ、これ…」

一人だけしかめっ面をしている者がいた。

「…ミツクくん？もしかして、口に合わなかった？」

希色が聞くまでもなく、ミクタは一度口に入れたものをそのまま

吐き出した。

「うわっ！汚ねー！何やってんだよ」

隣に座っていた亮介が慌てて飛び退く。

周りの反応など気にせずに、ミクタはテーブルに置いてあったティッシュを数枚抜き取ると、口を拭きながら言った。

「野菜しか入ってないじゃん、これ。ボクは野菜が苦手なんだ」
その言いように、巧が怒りを覚え立ち上がる。

「贅沢言っなよ！ほとんど手伝ってないくせに。肉だって少しは入ってるし、せつかく希色ちゃんが作ってくれたんだ、何も吐き出すことないじゃないか！」

「嫌いなものは嫌いなんだ。まずいなんて言ってないよ。嘘をついておいしいって言うよりマシだよ。…まあ、君の言うことも一理あるね。希色ちゃん、だっけ？悪かったよ、ごめん、吐き出したりして」

「…」

ミクタの発言に途中まで言い返そうとしていた巧だったが、思ってもみず本人が最後に謝りだったので拍子抜けしてしまい、言葉を失った。

謝られた希色も急に振られて一瞬驚いた顔をしたが、ミクタの言葉を受け止めて笑顔で言葉を返す。

「うっん、私もミックくんが野菜嫌いなのが知らなかったし、気にしてないから大丈夫だよ。野菜入ってたの知ってただろうし、一口食べてみてくれたんだもん。それだけで嬉しいよ。巧くんもさ、許してあげよ？」

「あ…うん、ちょっと言い過ぎたよ…」

巧は希色のその様子を見て、心が広いなあと思った。いつでも笑顔で返してくれる。そこが彼女の魅力だ。それに比べて自分は…。コロコロと態度の変わるミクタの性格を素直に受け入れられない自分を感じる。

相手は同じ顔をした自分ながら、謝罪の態度に少し感心したのだ

が、それは表に出さずに巧はミクタの皿を取り寄せた。

「残りは俺が食べるから。冷蔵庫に残ってるもんでも食べるというよ」

そう言われたミクタは巧ではなく希色の方をチラッと見ると、ニヤツと笑い「自分で探すよ」と言ってキッチンの方へ歩いていった。「おっとタク、俺も分け前もらうからな」

彼らの心の動きを知ってか知らずか、亮介は巧の元に置かれたミクタの皿を、自分との中間に引き寄せた。

「ああ、もちろん。希色ちゃんも座って食べなよ」

まだ残っている自分の分のチヂミに食いつきながら、希色にも食べるように促す。

「あ…うん、ありがと。ミツクくん…大丈夫かな？」

椅子から少し腰を浮かしてキッチンの方を伺う希色。

「大丈夫大丈夫。適当に何か見つけるよ」

巧が言うつと、間もなくミクタがキッチンから茶碗を持って戻ってきた。

「あれ？ご飯…炊いてたっけ？」

「昼に炊いた残りだよ。余分に炊いといてよかった」

巧の問いに答えると、ミクタは一緒に持ってきた納豆のパックを開け始めた。

「うわ、納豆だ！俺苦手なんだよな」、納豆。あの臭いがたまらん」納豆が混ぜ混ぜされる様子を見て亮介が鼻をつまむ。

「え、亮介くん納豆嫌いなもの！？体にいいしすぐ食べられるし、私は好きだけどなあ」

希色の言い分など受け入れず首を振る亮介。

「いくら体によからうが臭いに害がある時点で健康も害する恐れがあるってもんだよ…ほらほら臭ってきた！オエーッ」

ミクタが納豆を混ぜ終えてご飯の上にかけて、独特な臭いが辺りを包んだ。思わず希色も苦笑する。

「はは…確かにいいにおいとは言えないけどね…ほんとに体にいい

んだよ？しそとか加えると臭いが緩和されるし食べやすくなるんだよ。今度やってみたらどうかな」

希色が熱心に納豆の良さを説明するが亮介はそれどころではない。しばらく黙って二人の会話を聞いていた巧が、納豆ご飯を食すミクタの様子を見ながら問いかけた。

「ねえ、ミツク？そろそろさ、聞かせてもらってもいいかな？お前がこっちに来た理由…」

その途端、希色と亮介も表情が打って変わって真顔になり、巧と同様ミクタへと視線を寄せる。

一方問われたミクタはチラッと巧の方を見たが、すぐには答えず、ゆっくりと口の中のを処理してからお茶を一口飲み、そして巧の目をじつと見ると、ようやく口を開いた。

「ボクは…二つの世界のバランスが崩れてきてる原因を突き止めてきたんだ」

第十七話

(7)

「バランスが…崩れてる…？」

巧は全く話が飲み込めず、思わず聞き返してしまった。

「そう。いないはずの人間がいたり、いるはずの人間がいたり…とかね。ボクがこっちの世界に足を踏み込んでること自体、すでにバランスが崩れていることの証なんだよ」

ミクタのその語り口からは、たったこれだけの情報を話されただけでも、十分にそれが真実を語っていることが窺えた。

「なんか、ゲームみたいな話だよな」

「うん、私もそう思った。ファンタジーを扱った本とかで出てきそう。でも、最近は舞台は普通の世界で、ゲームで起こるようなことが現実で起きちゃうっていう構成のお話もよく聞くよね」

亮介と希色が口々に言う。

その話には乗らずに、巧はミクタに再度確認をした。

「じゃあ…ミツクはそのバランスを元に戻すために…？」

「そういうこと」

「ほんとに、ゲームみたいな話だな…。ミツクが世界を救う勇者ってところか」

「勇者」という言葉に、ミクタは大きくため息をついた。

「勇者、ねえ…。そんな歓迎される立場だといいいんだけど」

「と、言うത്？」

「そんなの、言うまでもないじゃないか。現に君達がもうすでにボクを歓迎してないはずだけど？」

ミクタが少しイラついた表情になってきたのを感じ、巧は慌てて首を振る。

「な、何言っただよ？そんなことないって。初めは驚いたけど、今はこうやって普通に話せてるんだし」

しかしミクタは首をかしげた。

「そう？まあ、そうかもしれないけど、一般には同じ姿の人間が二人存在してるのは、どう考えても歓迎はされないと思うけどね」

「確かに…こりゃ冷静になって見ると変だよなあ…」

二人のやりとりを顎に手をつきながら眺めていた亮介がボソッとつぶやいた。

その亮介からミクタへと視線を移すと、今度は希色がミクタに問いかけた。

「ねえ、ミツクくん？だったら、ミツクくんはどうやってこっちに来たの？ここに来たこと自体がバランスが崩れてる証だ、って言うてたけど…」

「ああ、それは、マジヨンナの力なんだ。いや、違うのかもしれないけど」

希色の問いに、イラつきを見せていた表情を引き締めるミクタ。彼の表情の変わりようを見て、巧はなんだか面白くない気持ちになる。

なんか…希色ちゃんには態度違うような気がするんだよね。俺には当たってくるくせに。気のせいかな…ってか俺、何こんなんでイライラしてんだ？ああ、やな性格だな、俺。ごめん、ミツク。

「双方の世界において何らかの異変が起きていて、それでお互いに行き来することができるようになってしまったわけだけだ」

巧の気持ちには全く気付かないまま、ミクタは話を続ける。

「さっきも言ったように、世界をまたがって移動するためには、同じ姿をしたもう一人のボク、つまりこの巧が必要なんだ」

「えっ？…ああ、それで？」

急に名前を出され、巧は気持ちを見透かされたかと思い焦ったが、話は半分聞いていなかったものの、すぐにミクタに続きを促した。

「それで、一番初めにこっちに来る時には強力な力が必要だったから、あの鏡を使ったんだ」

「あの…鏡って??」

巧からおおよその話は聞いていたが、希色にはすぐには話が飲み

込めない。

「ボクが出てきた手鏡だよ。恐らくマジヨンナが作り上げたものなんだろうけどね」

そこまで聞いて、巧は嫌な予感がした。

「ね、それで鏡はどこにいったんだっけ…？」

「えっ？」

ミクタもぎょつとした顔をする。

「どこにいったって…あの後どうしたんよ、あの鏡。あれを失くすと大変なことになるってのに！」

その言いように巧の不安はさらに煽られる。

「し、知らないよ…！あの事件の後、慌てて学校行っただから。ミツクこそ知らないのかよ、ずっと家に居たんでしょ…？」

焦った巧を見て、肩をすくめるミクタ。

「そう言われても…。君が行った後もこの部屋には来たけど、あの鏡は見当たらなかったよ」

「そんな、無くなったらどうなるんだよ！…あ、もしかしてニージョが…？でも逃げていく時には持つてなかったし…」

…その時、希色が「あれっ？何か足に…」と声をあげた。

「鏡って、これのことかな…？テーブルの下に落ちてたけど…」

そう言って、希色は足元から拾い上げた古い手鏡を、手に持って眺めはじめた。

「なんか、結構年季入ってるね。形見が何かなのかな…？でもかわいい！小っちゃくて使いやすそう♪」

まじまじと鏡の面を見つめだす希色。それを見て、ミクタは慌てて希色の元に駆け寄った。

「だ、ダメだっ！そんなにじつと見たら…！！」

「えっ？」

ミクタの声に希色が振り向こうとした瞬間、悪夢は起きた。

「きゃあああああああああ！！！！」

希色の持つ手鏡の面の向こうから、ゆっくりと顔がこちらへと姿を露わにし始めたのだ。

驚きと恐怖のあまり、手鏡から手が離せない希色。目は大きく見開き、体全体がブルブルと震えている。

「…な、なんなんだよ、これは…！？」

反射的に希色の近くから飛び退き、少し離れたところながら事の進行を見つめる亮介。初めて目にする恐ろしい光景に、立っていることがやっとの状態にいる。

その点、すでに同じ事を経験済みの巧。心臓がバクバクしながらも、自分の時よりも気持ちを冷静に保てていた。

希色の元に駆け寄るが、鏡の中から出てくるものを間近で見た瞬間、その足が言うことを聞かなくなってしまう。

「鏡を離すんだ！」

その場で最も冷静なミクタが、希色の手元から鏡を離そうとする。しかし思ったよりも強い力で握られており、なかなかそれができない。

そうしている内に、鏡からは希色と同じ顔の部分がすべて出てしまっている。そして今度は同じところから、手と思われるものが瞬時にニユツと出て、希色の頭を掴んだ。

「きゃあああああああ！！！！」

突然鏡の中から出てきた手に、希色の恐怖は最高潮となり、その瞬間、彼女は意識を失ってしまった。

「ちょっと乱暴すぎだよ、ロッキー。彼女が可哀相じゃないか」

「ごつめーん！だってミックだけこっちに出てきちゃってたしさ、
退屈だったんだもん」

ミクタが頭を抱えている横で、鏡の中から現れたもう一人の希色は、下をペロツと出していたずらっぽい笑みを浮かべた。

「タク…俺、なんか吐きそうになってきた…」

亮介は青ざめた顔で腹を押さえている。

「はは…無理もないや。俺だって何がなんだか…トイレ、行つてきていいよ」

そう言つて笑顔で返した巧も同様、つい今朝に自分の身に起きたことを思い出し、あまりいい気分ではなかった。

一同は今、二階の巧の部屋にいた。

ベッドの上には意識を失つたままの希色が横たわっている。

そして巧の視線の先には自分と同じ姿のミクタと、希色と全く同じ姿の少女（ミクタにはロッキーと呼ばれているようだ名前はまだ明らかではない）の二人が、まだ目を覚まさぬ希色を見つめながら言葉を交わしていた。

その様子を二人から少し離れた場所で眺めている巧と亮介。

「はあ…」

巧は思わずため息をついてしまう。

どうしてこんなことになってしまったのだろう…。

同じ人間が二人いる状況を他人の目から見るとこのように映っていたのかと変に納得しつつも、ただでさえ厄介な状況が悪化したことは言うまでもなかった。

とにかくこの状況を何とかしなきゃ。

希色が目を覚ました時に、この状況が目映つては、彼女へ更なるショックを与えかねない。巧は希色にはできるだけ負担をかけたくなかった。

そこで巧はあることを思いついて、ミクタ達には聞こえないよう、亮介にヒソヒソ声で提案した。

「ねえ、亮介？このままさ、希色ちゃんを家に帰しちゃって何もなかったことにするってのはどう？」

しかし亮介は苦いものでも食べたような顔をした。

「はあ??」

亮介の声が聞こえたのか、ミクタが反応して一瞬巧たちの方をチラッと見たが、またすぐにロッキーと呼ばれる少女との話をしだした。

亮介もその視線を感じ、より声の音量を弱めて巧に反論する。

「マジで言ってるの？そんな時間の問題だって。それに、どっちにしたって立花さんはもう一人のお前のことは受け入れちゃってるんだからさ、この際もう一人増えようがあんまり変わんなくない？」

その言いようには巧も引き下がるわけにはいかない。

「何言ってるんだよ、増えたのが他人の分身と自分のとじゃ、訳が違ふよ！こんなことに希色ちゃんを巻き込ませるわけにはいかないよ。やっぱり何としても家に入れるんじゃないか……」

「おいおい、十分巻き込んでるって。タクの気持ちもわかるけどさ、もうそんなこと言ってる段階じゃないやろ？それに立花さんは逃げるどころか、できる限りタクに協力しようとしてくれてたじゃん。

それなのに後でこのことがバレたら、立花さん悲しむぞ。俺が同じ立場だったら、んな中途半端なことされたらプチツとくるけどなあ」

亮介の言うことも最もである。ここまで巻き込んでおいて、今更新たな事態だけを希色に隠しておくのも彼女に失礼なような気がする。

しかし、巧は何とも複雑な気持ちだった。

このまま希色が事実を知ったとして、この先彼女に待ち受けている事を思うと…やはりできるだけその被害を喰わないで欲しいという気持ちも強くあった。

「でも…やっぱりさ、今日のうちだけでも対面させない方がいいと思うんだ…もう一人の自分だなんて、俺だって今日はみんながいたから考えずに済んでたんだ。正直まだ全然頭の整理がついてない状態だしさ、希色ちゃんもその事実に対面して、はいさようならまた明日、って家に帰すわけにはいかないでしょ？そのためには…」

巧が自分の言っていることを確認しながら長々と説明しているとプルプル。プルプル。

自宅の電話の呼び出し音が鳴り始めた。

「びっくりした…電話か」

「あ、もしかしたら巧のおばちゃんじゃない？」

亮介がそう言いながら電話に出るように促す。

「ああ、かもね」

巧も亮介に言われる前に自室に置いてある子機に向かい、受話器を取ると、通話ボタンを押した。

第十九話

(9)

「もしもし、赤崎です」

「あ、もしもし？巧くん？立花ですけど」

「…ああ、おばさん」

掛けてきたのは母ではあったが、巧のではなく希色の母だった。わざわざ電話を掛けてきたことから察して時間になり時計を見てみると、針はもう九時の半ばをまわろうとしていた。

色々あつて全く時間など見ていなかった巧は少し驚き、慌てて電話越しに謝る。

「あ、すいません、すっかり遅くなっちゃって…連絡もなしに心配でしたよね。えっと…」

普通ならそのまま希色に代わって安心させるのだろうが、今は状況が違った。

ベッドの上で気を失ったままの希色の様子を見ながらどうしたのかと考えていると、

「ああ、いいのよいいのよ、巧くん家に行くってことは一度帰って来たときに聞いてたから。一応何時に帰ってくるか聞いてこうと思つて。なんだつたらそのまま泊まってくつて言っても大丈夫よ。巧くんもお母さんがいないから寂しいでしょ？あ、希色から聞いたのよ。でもよく考えたら、泊まられると巧くんのほうが迷惑よね、うふふ。あら、ごめんなさい、あたしつたら一人でペラペラ…」

と一気に言葉が返ってきた。

「いやいやこちらこそ…ちょっと待っててくださいね」

おばさんってこんなに喋る人だったつけ、と思いながら適当に相槌を打ちつつ、何か手はないかと部屋全体を見渡す。

そしてベッドの上の希色からミクタともう一人の希色の姿に視線を移した時、巧はある考えが浮かんだ。

「ちょ、ちょっと、希色ちゃん…っていうか、もう一人の希色ちゃ

ん？」

受話器の声を送る部分を押さえ、ミクタの隣の少女を呼ぶ。

それに気付いた少女の方は、「え？アタシ??」と自分を指して巧に確認した。

巧もそれを見てちょこちょこと頷き、彼女を手招きする。

「なになに？どしたの？」

頭の上に疑問符を浮かべながら、早足で向かってくる少女に、巧は小声で説明を始めた。

「あの、さ、ちょっと協力してほしいんだけど…。今の電話の相手が、希色ちゃん…つまりそこで寝てる子のお母さんんだけど。君も希色ちゃん、なんだよね？よかったら上手くおばさんと話をつけてほしいんだけど…」

少女は巧の提案に素早く瞬きを数回した。

「希色？…確かにその子は希色だけど、アタシは希色であって希色じゃないんだ。ミツクとキミの関係と同じってこと。ロイキっていうちゃんとした名前があるんだよ」

ロイキと名乗った少女は一息つくと、腰に手を当てて巧に改めて問う。

「それで？どうしたらいいの？」

「…」

見た目は希色そのもののなのに、希色のそれとは全く異なったオーラを放つロイキにしばらく目を奪われてしまう巧。

ロイキがこちらを見返しながら眉を片方あげるのに気付くと、すぐに我に返って説明を続けた。

「あ、えっと…とりあえず意識を失ったことは伏せておいて、希色ちゃんの振りをして、家に帰るようにおばさんと話を合わせてほしいんだ」

「なんだ、そんなこと？お安い御用よ。アタシそういうの得意なんだ。それに、希色の親とのやりとりはよく見てるしね。じゃ、ちょっと電話貸して」

「あ、う、うん…よろしく」

あつさりと承諾してくれたので、巧はちょっと拍子抜けしながら
ぎこちなくロイキに受話器を渡す。

受話器を受け取ったロイキは、巧と同じように声を送る部分を押
さえて一呼吸置いてから、声をかけた。

「あ、お母さん？お待たせ！ごめんねー、巧くん家でチヂミ作って
食べてたら長居しちゃって。これから帰るから。…うん、うん、は
ーい、わかった。じゃあまた後でね。うん、バイバイ」

と、切のボタンを押して話を済ませるロイキ。

その様子に、周りで聞いていた一同は皆それぞれに感心する。

「完璧じゃん…さつきとは別人だな。いや、同じではあるんだろう
けど」

亮介は希色とロイキを交互に見比べ、さらに巧とミクタに視線を
移し、またも頭をこんがらがらせた。

「すごい…。それで、おばさんは何だつて？」

巧も少し尊敬の眼差しでロイキを見つめながら、話の内容を伺う。

「ふふん、楽勝楽勝」 えっとね、まあ簡単に言えば気をつけて帰
りなさいって感じかな」

「そっか、ありがとう。感心したよ、全然違和感なかった」

巧のその言い方にロイキはニヤツと笑みを浮かべた。

「そりゃーね、希色はアタシなんだもん。で、話はつけたけど、こ
れからどうするつもりなの？希色は家に帰さなきゃなんなくなっ
たけど。さすがにその代役はアタシは嫌だよ？」

ロイキの話している様子を見て、やはり希色と話している感覚に
はなれないことに、巧は戸惑いを隠せない。自分と同じ姿であるミ
クタに対してであっても、それは同様のことだった。

巧は何となしにミクタの方を見たが、たまたま目が合つと、慌て
て視線をロイキの方に戻し、問いに答えた。

「そっだね…とりあえず、希色ちゃんを起こさなきゃ。そのために
は…えっと、ロッキーって呼んでもいいのかな？君にはどっかに隠

れてもらわないと」

「ロッキー」と呼ばれ、ロイキは笑みをはつきりさせた。

「うんうん、そう呼んでもらった方がしっくりくるよ。なるほど、あくまでアタシが出てきた事実を希色に隠しとくってことね。それでもいいけどさ、言っとくけどそれじゃ一時しのぎにしかならないからね？」

「え？」

すぐにはOKかどうか分からない返事に、思わず聞き返す巧。

「だから、本人にわかるのは時間の問題だってこと。ま、希色なら大丈夫だって。だってアタシなんだもん。確かに今ばらしちゃうと負担かかるだろうし、対面を後にするのはアタシも賛成だけど。ね？ミツク」

ロイキは自分のことながら希色のことを冷静に判断し、ミクタに意見を求める。

「ああ、ロイキがそう言うなら、それでいいんじゃない？ただ、出てきたからにはそれなりに上手くやってよ？ただでさえややこしいわけだしさ」

ミクタは慣れたように言葉を返し、ロイキと共に頷いた。

その様子に巧は、二人は鏡の向こうではどのような関係なのだろう、と思った。自分と希色のように気心が知れた仲と言うのは同じようだが、なんというか、友達というよりパートナーと言った方が的を得た印象を受ける。

「オツケー、でもね、鏡の向こうに行っちゃうと希色のところにしか出られなくなるから、この家のどっかに隠れとくことにするよ。その間に…巧、上手く希色を送り出してね」

ロイキに言われ、巧は心配になって聞き返す。

「え、ここにそのまま居るの！？それってなんか困るっていうか

…」

実際困る。仲がいいとはいえ、希色を家に泊めたことは今までにない。まあ、今回相手は希色ではないが、希色なのだ。女の子を家

に泊めることにこれまた戸惑う巧。

そしてもう一つ心配なことに気付く。

「それにさ、朝希色ちゃんが鏡を見たりしたら…ヤバいんじゃない？」

ロイキは巧の反応に対し、いたずらっぽい笑みを浮かべる。

「何？アタシが泊まるのに抵抗感してんの？あはは、だいじょぶだ
いじょぶ！別の部屋使わせてもらうし。それとね、鏡のことも問題
全然ナッシング！だってアレはアタシじゃなくて…おっといけない」
「??？」

ロイキが急に口をつぐんだので巧は気になって口を開こうとした
が、彼女はごまかすように、

「まあ、とりあえずアタシはあっちの部屋に行つとくから、希色を
起こしてばれないように連れ出してよ？」

と声を高めて言い、そのまま巧の部屋を出て行った。

「あ、ちよつと…」

巧はロイキを追いかけようとしたが、ミクタに「起こすよ」と促
され、部屋の外に目をやりながら希色の眠るベッドに歩み寄った。
ミクタは口パクで「早く」と急かす。

巧も「はいはい」と同じように返し、希色の方へ視線を移した。

「希色ちゃん」

希色の肩に手を掛けて、軽く揺らしながら声を掛ける。

「まだ気失ってるんじゃない？」

亮介も巧の隣に来て希色の様子を窺う。

「うゝん…。希色ちゃん??」

もう一度希色の名を呼ぶと、しばらくして彼女は「うゝん」と唸
りながら、ゆっくりと目を開けた。

「あれ…巧くん？」

希色は目の前で自分を見つめる巧を確認し、そしてその隣にいる
ミクタと亮介も同じように自分を見つめているのに気付くと、慌て
てガバツと飛び起きた。

そしてあちこちと首や視線を動かして周りを確認した後、

「え？え？私…どうして？やだ、ごめんなさい！」

と軽くパニックを起こしてベッドから慌てて降りようとした。

巧はそれを軽く押し留めて希色をベッドに座らせたままにし、

「よかった…とりあえず元気はあるみたいで」

と言いながら、これからどうしようかとこめかみの辺りを掻いた。

夜十時過ぎ。

巧と亮介、希色の三人は希色の家までの夜道を歩いていった。十一月に入ると、外はひんやりして肌寒い。

住宅地らしく、辺りはしんと静まり返っている。雨も再び降り出した様子もなく、道路も乾いてきていた。この分だと、明日は晴れかもしれない。

「ごめんね、私、いつの間にか…」

頬を赤らめて謝罪をする希色。実際は彼女に悪いところなど何もなかったのだが。

「いやいや、気にしなくていいって。疲れてたんだよ、きつと」

巧は真実がばれないよう、ごまかしの言葉を作る。

「でもね、変な夢を見たっていうか…すぐリアルだったんだけど、鏡の中からもう一人の私が出てきたの…！私の目の前に顔が近づいて。もう恐くて…」

希色は先ほどの事件を思い出し、赤らめていた表情を今度は青ざめていく。

よほど恐かったのだろう。そのことは意識を失ったことからもわかったが、希色を家まで送ると言った時には心底嬉しそうだった。

「えっ！？そんなことが？…それは怖いね」

やっぱ覚えてたんだ…。

巧は、バレルのも時間の問題だと言っていたロイキの言葉を思い出した。

希色ちゃんを送って、帰ってからミツクたちにどうやって事実を希色ちゃんに伝えればいいか相談してみよう。

ただ、せめて今夜だけは混乱させるようなことはしたくない。そ

のためにはどう返事をしていいものやら。

意識をすると返って墓穴を掘りそうで、巧が返事に詰まっていると、亮介が

「立花さん大丈夫だって！実際んなこと起こってないから。タクの話聞いたり、もう一人のタクを見たりしたからそういう夢見たんだって」

とフォローを入れた。

しかし希色の不安げな表情は変わらない。

「でも…ほんとに夢だったのかな…。巧くんのことを思うとこんなこと言ったら失礼だけど…もしあれが本当だったら、私、恐い…」
そこまで言ってしまうと、希色は歩んでいた足を止め、今にも泣き出さんばかりに両手で顔を覆った。

「希色ちゃん…」

このような状況にあまり遭遇したことのない巧。一瞬どうしたらよいか視線が泳いでしまったが、希色の様子を見るとたまらなくなつて、希色の正面にまわって向かい合わせになると、言葉を選ぶように言った。希色はうつむいたままだ。

「もし本当にそんなことが起きてても、大丈夫。俺と…亮介もいるし、みんな一緒だったら乗り越えられるよ。っていうのも、希色ちゃんがそう言ってくれたから俺、今平気で居られるんだと思う。あの時協力してくれるって言ってくれた時は、本当に心強かったんだ」

希色はそれを聞くと、えっとちいさく声を発して、顔を上げると巧と視線を合わせた。

「希色ちゃんは強いなって思った。もし本当にもう一人の希色ちゃんが現れたとしても、その意気でガツンと言っちゃえば大丈夫だよ！…それにさ、そんなに恐がることじゃないよ。ミツクを見たでしょ？きつと悪い奴じゃないよ」

「そうそう、問題ないって！逆に楽しくなるかもよ？」

亮介も一言添えて笑い飛ばす。

「巧くん…浅葱くん…」

希色は巧と亮介を交互に見て、ゆつくりと目ばたきをした。

巧は希色の目を潤ませた表情を見ながら、こんなことを言っておいて果たしてそれは希色のためになることだったのかと不安になった。しかしその不安は希色が笑顔を見せてくれたことで、すぐに拭かれた。

「ありがとう…！すごく安心したよ。ごめんね、取り乱しちゃって…。巧くんの家ではあんな風に言ってたけど、ほんとはやっぱり恐かったんだ。でも、巧くんのことを思ったら、私が助けてあげなきゃって思ってた…」

「俺達も、同じ気持ちだよ。希色ちゃんが困ってたなら、絶対力になるからさ」

巧は言いながら、夢の話が事実であることを伝えた後でも、希色はまた笑顔に戻ってくれるだろうかと思う。

希色はそのような巧の胸の内も知らず、笑顔で応える。

「うん、ありがとう。本当にごめんね、実際に起きたわけじゃないのに…あんなリアルな夢見たの初めてだったし、巧くんの身には実際に起きてることだったから、私、急に恐くなっちゃって…。でももう、大丈夫！もしもう一人の私が出てきても、巧くん達がいるし…もしかしたら、その子と仲良くなれちゃうかもだし！…うふふ、そう考えるとおかしくなってきた」

緊張の糸が切れたのか、希色はそのまま腹を抱えて笑い出すと、しばらく笑いが止まらなかった。

巧は希色のその様子を見て、とりあえず今日言ってしまったなくてよかったと思った。この様子なら、今度真実を告げたとしても、希色ならきつと今日のように受け止めてくれるだろう。

巧は一人で頷くと、わずかに笑みを浮かべ、

「…じゃ、行こっか。おばちゃん心配するしさ」

「巧くん達には心配かけちゃったけどね。うん、行こう！」

その後希色の家までの道中、希色の笑顔が絶えることはなかった。

希色の家の前。玄関の戸のところで希色と母親が話をしているのを、門の外で巧と亮介はその様子を見守っていた。

希色の家は母親の趣味なのか、全体がメルヘンチックに綺麗にまとめられている。綺麗に刈り揃えられた芝生に、白い小さなブランコのある庭。建物自体もちよつとしたお城のようで可愛い。

巧は希色が、母親が今度は噴水を付けようとしているという話をしていたのを思い出した。

「ただいま、お母さん。ごめんね遅くなっちゃって。恥ずかしいんだけど私、巧くん家で寝ちゃったみたいで。しかも送ってもらっちゃった」

希色が巧達の方を振り返りながら、事のいきさつを話す。

「そのまま泊まってきてもよかったのよ？うふふ。…あら、何だか顔色が良くないみたいけど…？」

母親というのは子どもの変化には敏感である。

すでに涙のことなど忘れかけていた希色は、その指摘に内心驚きながら答える。

「えっ…？ああ、寝起きだからそう見えるんじゃないかな？…やだもう、私どうして寝ちゃったんだろう、恥ずかしいなあ」

希色はそう言っただけを脱ぎ、玄関から上がるうとしたが、そのままドアの方へと寄って行き、親子で開いたドアから巧達の方を向いた。

「巧くん、それから…浅葱くん、だったかしら？ありがとうね。ちよつと上がって行って、って言うような時間じゃないから残念だけど、今度ぜひ家にもいらつしゃいね。気を付けて帰るのよ？」

巧達は希色の母の言葉に小さく礼をする。

「そうだよ、その時はまた何か作ってご馳走したげるよ！」

母親の意見に希色も同調する。

「ありがとう、喜んで行くよ。また明日ね！」

「立花さん、料理上手いから楽しみだな。その時はまた呼んでよ」

「んじゃね！」

巧と亮介が手を振って帰ろうとすると、

「あ、ちよつと待って！」

と希色がそれを止めた。

二人が「ん？」といった顔で続きを待っていると、彼女は

「明日は作戦続行だからね！マジヨンナ先生のこと、忘れないでよ？じゃあね〜」

とだけ言い、「バイバイ」と口パクで手を振ると、ドアをバタンと閉めた。

「……」

巧が閉められたドアを見つめたまま黙っていると、

「……立花さん、しっかりしてるな……。そういうことはちゃんと覚えてたんだ……」

と亮介が呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1519b/>

鏡の中のボク

2011年1月2日02時39分発行